

昭和十九年一月一日（土）【元旦】

昔の正月といふものは嬉しい待遠しいものであったが、段々正月は変化と刺激の契機として新しい決意の時期として意義がある様になって来た。

自炊三人組無事迎年。望月君早暁寒風について札幌神社に参拝。歸舎した頃他の二名初夢より醒む。

「ざうに」は雑煮と書いて具のものを十数種も入れるところがあるとのことであるが我々の今朝のざうには大根と餅だけである。こゝにも量を要求する時代の姿を反映してゐる。だが、まめに暮す様にと黒豆と千万の子孫を栄へしめる様にと数の子が我々の手になって食卓に盛られたのは正月の臭いがする。

朝食が終ると望月君は部屋で年賀状を書き、三村君は「顔の型態美」を読み、余は「運命」をきく寂しき正月に耐へかねて夜は三人東宝に初映画見物に行く。

今日は朝から寒い、水道が凍る。

一月二日（日）【初売り】

淋しさの果てなむ國を求めて朝から三人街に出る。初売り出しで目星しき本も一冊位はと出掛けたが合憎今日は日曜だった。でも人出は多い。トランプを見付けて歸って早速初める。未だしたことのないポーカーをする為に舎のエンサイクロペディアをひく。この辞書がこんなに有効なものだとは知らなると笑ひ合ふ。夜はトランプで時間の過ぎるのも忘れる。

一月四日（火）【賄のおばさんの依頼】

夜、先輩の処に賄のおばさんのことを頼みに行くが、亦望み薄い返事しか得られず。寒き夜を淋しく歸る。

夜、岩瀬君歸舎する。

一月五日（水）【鼠三匹捕獲】

朝から鼠三匹取る。何れも台所のストーブの下に居るのを追ひ出し逃げるところをホーキで一撃するのである。近頃、台所を恣に跳梁^{チョウリョウ}してゐた鼠共に一大膺徴を加へ痛快である。午後からひどく雪が降ってきた。その雪の中を三村君の知人で今度、賄のおばさんのことで大変お世話になってゐる雨宮さんと云ふ方が我々の自炊生活を慰問に来られ大いに恐縮する。二人は久し振りでお殿様になる。（飯島）

一月六日 【トランプ】

朝八時頃起床早速飯を焚く。昨日、知人の方が、今日の味噌しるの味を刻み米を洗って居いて下さったので、甚だ楽だ。火をつける丈で済む。昨晚一時頃、舎の先輩が突然訪れて汽車の都合によって今晚とめてくれと云八る。それで今日八ねむい儘にねぼうをしてしまった。

十一時頃、望月氏御歸舎になる。いつもの事乍ら今日も朝ひる兼食。午後河せ柔道部の合宿を了へて歸舎す。今晚八寮に一泊する由。夜八、
、美味なり。夕食後トランプ遊びに夢中になってゐる間に、もう十二時過ぎとなる。I. M.の両氏、是非とも勝たずんバ

止めず、との意気ものすごく、時計八遂に一時をうつ、こゝで就寝。自炊生活とも愈々お別れとなる日が近いた。賄の小母さん仲々見つからないので、一時来て頂く方の交渉を始めたのだが、大体見込みが付きだ。I.氏八連日の様にかげづり廻って居る。

一月七日【石炭八級】

朝食十時

土居君、遊に来る皆でトランプをやる。

ひる八餅を焼いて食す。

石炭をやっと持ってきた。公区長の証明をもって催促したからである。皆で二頓ばかり。塊炭八八級、まるで石の様なのが混って居る。夕食八河セ、岩セ、I. M. 氏並に小生と、てんぷらを食ふ。夜八、知人が来て、又色々と賄の件に付相談にのって下さった。草地、野尻歸舎（夕食取らず）

一月八日

予科生が列行進参加の爲、登校。M氏授業の爲、出掛ける。I氏並小生八留守番、授業無し。十時頃、石川君歸舎、汽車が大分遅れた由。林檎を御馳走になる。ひる、星の爺さん来り。二時間以上とくとくと宮部さんの話。二昔も前の札幌の話などする。全く閉口。夕食八、久方振りに七人集ひて寄鍋をつゝく。

一月九日（日曜日）【自炊、戦局に対する覚悟】

0時三十分頃小杉君寄宿舎に帰る。八時には中村君帰り總勢九人である。

朝食は十時頃出来上がった。皆久し振りではあれな自炊の味にそれでも舌鼓を打って食べたことだらう。

晩飯は一時頃から飯を炊いたり鯿を焼いたりした。出来上がったら四時半頃だった。

夜は小生等は「勝どき音頭」といふ映画を見に行く、帰って見れば、田崎、河村、北野の三君顔をそろえて現はれる。又、更に後く、佐本君現はれる。

ラバウルの空中戦、激烈を極め、敵四十一機の撃墜といふめざましい戦果があがってゐる。吾々はたとへ一つ一つの戦争には勝てても最後の勝利への決意を持たねばならない。ラバウルは南方資源防衛の一大據点である。若しラバウルにして敵の手にわたることあらば、吾々の石油を始めとした南方資源は恐異を感ずるであらうし、萬一の場合を考へねばならなくなるかも知れない。勿論、吾々には其の日の来るの覚悟は十二分に持ってゐることであるし、祖國の爲に天皇の爲には死ぬ意氣を持ってゐる。世界に冠たる日本學生の優秀性と活動性を如実に実現する筈である。南方諸地域に銃をとり機に乗り軍務に勵む勇士達には唯感謝丈である。吾等は御身達の苦勞は映画に見、話に聞いてゐます。血の出る程の苦勞には、もう何も願ひする氣も起らないが、只、御國の爲に勝ち抜いて下さいと……。吾等も御身等に負けず積極的に學に勵み日本の學生はどこの國の學生より勝つてゐるといふようになるつもりである。（望月）

一月十日

今日から學校開始。朝、本吉君寄宿に現はる。

自炊の寄宿舍は何か暗い感がある。

一月十一日

晩、山本君殿りをうけたまわって帰る。

雪降りやまず、玄関の方は雪に埋って出るに出られず、勝手口から登校する。汽車のラッセルの音、静夜に寂莫を訴ふ。

一月十二日（水曜）

雪降る。學校から帰って見たら、誰が作ったか玄関の前に道が出来上がってゐた。飯島の元の下宿の小母さんに手伝って貰ってから、もう三日目になる。毎朝当番で早起きして、飯を炊いて貰ふことに吾々は済まない気がする。

一月十五日（土）

明日のスキー・ツアーの爲に大いに御馳走に腕を揮ふ。ボタモチにオシルコ。

一月十六日 日曜日【スキー行】

早朝河村、野尻の両君炊事係としてアルバイトを爲す。朝食九時攝取、昨日作り置きし、ぼたもちを辯当につめて、リュックに入れる。久し振りの舎總出のスキー行である。目指す鋭鋒八幌見峠、一行十一名。

明け方降れる粉雪が根雪を柔かく蔽って居てスキーに八絶好のコンディションなり。

舎を出発する八十時頃ならんか、幌見峠についたの八大体ひる近くであった。頂上八さすがに風が強手袋を通して手がきれる様に寒い。とある小屋かげにて持参のぼたもちを食し腹ごしらへをしてからゲレンデをする。

飯島氏の素ばらしき直滑降、其の美事なホーム八、之を見る者しバし我を忘れるばかり。特に其の轉倒制動法八他人の追隨を許さざるものにして、妙麗の御婦人の直前等で、あざやかに急停止する当り正にスキーヤー連中の耳目を驚かした。

クリスチャニヤの大家 M 氏八、飯島氏の後を追ひて直滑降をなせしが、中腹にて遂に轉倒しストックを折る。何と目を轉ずれば、はるか上方より悠然と滑り来る者あり。見るもほれぼれする滑りぶり、スキー帽から手袋の先に到る迄、全身白地に黒の斑点あるスキー服に身を固め、スキー帽の中央からランランと二の眼のみ輝かせて飛鳥の如く過ぎ行くその豪快さ、誰ぞあらん。彼こそ我らのホープ河村君なりき。

二時頃、雲間より青空あら八る。冬の乾燥したスミキッた天空八、スキーを為すものゝ限りなきよろこびである。歸途、萬溪を抜けて洗山に到る、それより歸舎四時頃。夕食后、しるこに舌づゝみを打ち、ひるの疲れも忘れる。

この日、中村君退舎

一月十七日 月曜日 晴後雪

朝の炊事は十号室、これでどうやら一廻りした。賄の小母さんもやっと決定した様である。先づ一安心。どうもご苦勞様でした。

夕飯のおかずに黒豆の甘く煮たのが出る。この所甘味の連続甚だ快適であるが其後を思ふといささか心細くなる。月次会が二十九日に決定、委員長に河瀬君任ぜらる。（石川）

一月十八日 火曜日

暖かい日で雪が静かに降る、又大分積った。玄関の雪はきれいに除けられてある。
實科の人の骨折によるものである。是から積極的に何でもやり抜かねばならぬと思ひます。
今日は飯島さん達の炊事である。流石に飯の出来具合は見上げたもの、今度来る小母さん
のは之にも増して旨からうと思うふ。早く来て呉れると良い。
吾等學生の身で而も何時御召にあづかるか分からぬ一時間一時間を何うして無駄に使って
良いものか。

月次会の辯士諸士よ舎生は期待して居るぞ！！（佐本）

一月十九日 【幌見スキー行】

幌見スキー行つゞき

当日のヒーローM氏。人目をひくに十分なチャチなダブルのハーフコートに身をかため服
装にふさはしい見事な派出な廻轉、制動、直滑降、高いゲレンデより秘術をつくしてのス
キー振り、我々たゞアレヨアレヨと見とれるのみ。来る早々ストックを折ったY K氏皆の
とめるのも聞かず「イヤダイヤダ」と鷲毛霏々として降る中を肅肅として下山。スキーを
かついで上り、かついで下り全く御苦勞様。如何なる腕前を示すかと楽しみにされた我等
がT氏、流石期待にそむかずストックを振り手を上げ、足を上げその賑かなこと、さなが
ら少女歌劇の如く流石東京仕込、お見事なもの。後学の爲になった。時々、踊り疲れたか
ゲレンデの中腹で休憩されてゐるのが屢々見られた。Ku氏、Ka氏道産子だけあってなか
なか見事、盛に練習をしてゐた両氏、又轉び方の研究もされてゐるのを見受けられた。I氏
も負けず、立派なスッテンボーゲンを練習。御大飯島氏、急坂を下り制動効を奏さず前の
崖と正面衝突、雪にうもれてアップアップ、皆、腹をよじらした。何しろ近来にない愉快
な行事であった。今後時々かゝる行事を行はれんことお願いする。 K記

一月二十日【寒稽古】

今日より寒稽古の交替が行はれ、二年は武道となる。正月以来腹の工合が良好なので身體
の調子がよく、猛烈に稽古して飛廻ったために背中をなぐられたり脊椎を突かれたり、す
ねをなぐられたり、練習が終了したら身体中がいたみ出して弱ってしまふ。

昨夜は八号室は雨もりがひどく、枕元にぼたりぼたりと落ちるので耳ざはりで熟睡できな
かった。

今日は早速雪掻きをする。すべるので冷汗を流しながら恐る恐るどうやら終った。お蔭で
雨もりもやんだ。

一月二十一日【仮煙突掃除】

毎日の武道で体中が痛み気分が悪い。風邪を引いてゐるせいか頭も少々痛む。

農類二年から発疹チブスが出たとやら、あまりいゝ感じがしない。

日中の暖さのため屋根の雪が落ちかゝり食堂のストーブの煙突を突落す。應急処置として
煙筒の部分の雪を飯島さん、三村さんと落す。

賄の小母さんもいよいよ明日来舎されるとて小母さんの室を掃除する。

夜も暖かである舎は極めて静かである。明日の飯焚に備へ早く床に就くことにする。

一月廿二日【賄の小母さん来る】

遂に待望久しかりし賄の小母さんは今日来られ、最後の飯焚を草地君とやる。

寒し、睡し！ 連日の雪で食堂、台所のストーブの外の煙突は損はれ、火の具合はあまり好くない。久しぶりの熱い味噌汁を飲む。

学校は発疹チブス発生を示し当家に立入らざる様注意すべしと掲示を出した。

一月廿三日

今朝は早くから望月、三村、河村、岩瀬、本吉の諸氏、春香山へ出掛ける。新しいスキーを昨日買ひ込んだ許りの望月氏は颯ソーとして出発。河村君、スキーを折って歸舎。マア、頭を折らなくて勿怪の幸であった。 T T

【舎の生活は】

自分の事も大切だらう、然し、舎の生活は吾々の生活の筈である。皆んなで協力してもっと活気ある生活を建設して行かう。自分は性質がそんな性質でないと云ふ人ならば私は敢て云はう。そう云ふエゴイスティックな性質をこそ舎生活で練りきたへて行かねばならないのだと。 乱筆多謝 北野

一月二十五日(火)

陽にとけてざらざらになった雪面に煙突のすゝがこびりついて穢い。樹上に盛り上ってゐたのもべそと減って、開放的な明るさが溢れる。枝間を (漂)ふ風の中にふっと新しい匂が籠ってゐる。いや内心の自ら生る發現が、ふっと匂となって臭覺に生きたのかもしれない。春は近い。寄宿舍にも春が来る。陽は見える。最も活気ある生活とは各舎の各自の を充分活動させることにあるんじゃないのかな。

自生活の確立、**プレイニ阿斯**な勉學によって、自らなる内心の方向が舎生活の充実に向ふ。舎生活に対する充足は結局各自の内心の充足の集合に外ならぬ。ただらと表面的な形式上のみの **同**なんぞ一文の價値もない。佐本さん達スキー大会にて御立派な**成績**。晩飯がおそくてかなはん。強要すべきじゃないけど、可能なる程度において早くしてほしい。

山本

一月二十六日(水)雪 【積雪已に四尺以上】

三学期が始まってより已に二十日、人員もすっかり整ひ、賄ひの小母さんも来て下さって寄宿舍も漸く落ち着いて来たと思ったら予科はもう試験が迫ってきた。全くウンザリしてさふ。今晚はうどん？の夜食が出た。快適！！と思って食べたが正直の所あまりうまきはない。近頃、札幌は毎日のやうな雪降り積雪已に四尺以上。

一月二十七日(木)小雪後晴【煙突掃除】

二三の部屋で煙突掃除をやってゐる、これで二回目であらうか。掃除は寒くていやだ、然しその後あ何と云ふかさっぱりとして氣持が良い。一ヶ月の重荷を一ぺんに下した氣持である。

晩飯の味噌汁は大へん美味しかった。もっと食べたかった、いたしかたがない。(本吉)

一月二十八日（金）曇【しばれる】

今日は仲々しばれる、風の強いせいであらう。しばれるといふ言葉は豫科最初の植物の時間に限三さんから教へていただいたのだが、たしかにしばれるといはなくてはその感が出ない。夜舎生總出で道路の雪かきを行ふ、一度では出来ないのではないかと思つたが皆元氣よく、とうとうやり終へてしまった。その後うどんの 今晚のは肉が入つてゐてなかなか た。（孝）

一月二十九日 土曜日【月次会】

本年度最初の月次会、委員、河瀬君、食事係長、本吉君、整理係長、北野君等の努力及、其他の舎生諸君の御協力により舉行。今日は例会と形式が変り各辯士が夫々の演題をもつて話すことになった。辯士諸君左の如し

一、舎生活の報告 北野君

現今の青年寄宿舎生活を他舎との比較に依り述べ、最後に君の舎生活への積極的、肯定の決意を述べ。

一、炭素同化作用のけん討 佐本君

炭素同化作用の概略及、之と食料との關係について君の考へを述べ

一、戦争と生理作用 草地君

戦争の生理的面よりの一考

一、連続と無理数 田崎君

デデキントの本の内容を紹介せるもの。君八彼の本を充分理解されて其の概要を我々に説明す。

一、感想 望月氏

最近の戦局と我々の之に対する覚悟を述べらる

一、吾人須らく自由主義を超越すべし 副舎長

最近の全体主義に対する大体の批判と自由主義の現今なほ取り入るべき点多々あるを論じ、吾人八須らく眞の自由主義に徹すべしと大声す

以上六名、夫々熱辯を振るハレ盛会なりし

其後、時田先輩が（フヰマツヱ）海草に臭素の多量に含まれるを発見され、現今、之が戦争資材として大いに活躍しつゝあるを語り、其の発見の由来について自筆の随想を読まれた。次いで亀井先輩立ち、現在のご自分の研究について一端を語る。最後に宮部舎長先生が立たれ自叙傳の内、御祖父の時代から御自分が横濱の英語学校に入学された当り迄をお話になる。

会終つて、ざうに（もち八食事係の搗きしもの）あまざけの馳走あり。解散十時頃なりし。宮部舎長、大変御満足の様子にて、今後も大いにかくの如き月次会の開催される様に、との御話であった。

一月三十日 日曜日

スキー正に酣、朝から望月、三村、本吉、佐本の諸君、春香に出掛ける。今日は誰もスキ

ーを折らずに無事歸舎とのこと、幸なり。

一月三十一日 月曜日【舎内亦平穩】

一月もこゝに終る。変化多かりしこの月も今はその定位に復せし如く落着きの気あり。今日は久し振りに雪降らず、舎内亦平穩なり。

二月一日 火曜日

夜、久し振りに志るこが出る。甘きものはうれし！！

二月二日 水曜日

又大雪、小樽からの列車は朝の間不通とのこと。 飯島

二月三日（金）

夜七時より常會あり。隣組の人達来る。石炭の配給制の件、掲示されてゐる。

節分の前日で、今日は昔なら豆を撒く筈であるが、決戦にはそんなことはなく、マーシャルの戦果が氣にかゝる。

二月四日

雪も降らず、落着いた冬の一晩である。小生は今日もストーブを焚かず遊んでゐる。他の舎生は忙しさうである。聞けば、予科の試験は十六日からださうだ。

二月五日

歸舎するなり煙突掃除をやる、丸一日振りで煤が山の如く出た、さっぱりとした。ついでに台所のも掃除した。工学部のスキー大会があつたとかで三村さん、田崎さんエッセン豊富にほくほくとして歸舎さる。学校では中央講堂で講演並に音楽会があつて遅く歸つた人もあつた様である。 マーシャル戦熾烈。 さ記

二月六日【北の國でスキーは必要】

開戦記念日、全学会のスキー大會あり。此の頃は体力の練成は盛んに要望されてゐる。又、スキーをやれと云ふ。北の國でスキーは必要で、又スキーの外に野外の遊ぎはない。日曜は早朝からスキーヤーが出動する。子供も年の多い人も若い女も、若い男は云はずもがな。而るに学生風姿のないのは？ この良い天気は、そして昨夜降つた新雪は軟らかく優しくスキーヤーを待ってゐると云ふ。こんな良いコンディションの時に敢へて石炭を消費する手はないと思ふ。山の上から街を見て先づ街の空気の汚ないのに驚かされる。私は勉強も勿論大切だが、先づ、体であると思ふ。そしてその意味で北の國でこの白銀の舞ふ冬はスキーを大いにやらねばならぬと思ふ。上手下手は兎に角として、さうすれば血液の循環もよくなり、又考へ方も。運動部長S生、積極的となり口論よりも先づ実行となると思ふ。

二月七日【ストーブが焼えなくて眞に困る】

日曜の後に必ずやってくる「ユウウツ」な月曜日、それに試験も近いと思ふと実に重苦しく一日を送ってしまった。晝の食事が食票制をとる様になつたので學部の者に横どりされる心配無くなり大いに嬉しく思つた次第。夕食に「オヂヤ」があつて快適だつた。

いつも話になると思ふ事だがストーブが焼えなくて眞に困る。予科の試験の時にこんな状態では些か困る事にならうと思ふ。石炭係の人はこの点考へ戴きたいと思ふ。夜に入

ると直に皆勉強する様です、静かな落ついた感じがする。「ソリの音」≠切は十日とか。大いに快作を応募されて充実したものを完成する様にと祈る次第である。舎亦平穩。

S N記

二月八日【過去二ヶ年の経験】

相変わらず鼻水が鼻孔でこほりもぞもぞする寒さがつく。予過去二ヶ年の経験より“予科の試験は帰省の為の手段であり、それは帰省に必然的に附随して起る因果関係を有する観念的現象に過ぎず”なる結論を抽象するに成功せり。夜、甘きお菓子出て感激す。

K生

二月九日

晴天で気温も良く、おまけにスキー教練だ。朝から心がそわそわして落ち着かない。四時限休校、中食を満腹し円山に向ひ、スキーに興ず。

夜、飯島さん寄舎さる。 岩瀬

二月十日【粉炭六級品】

本当に、日に日に、日が永くなってゆく様だ。雪とのお別れもあと三ヶ月か？待遠しいものだ。兎に角早く暖くなってほしいものだ。石炭来る、粉炭六級品。若し今日来なかったら何んなことになったことか。

明日は授業なし、スキー行もよし、一日ねむるのもよし、勉強するもよし、如何に送らう。櫛の音の原稿期限は本日限り、頭の悪い僕にはよいことも書けそうにもない。河瀬君兄さんの面会のため七時五十五分の急行で に帰省した。

二月十一日【紀元節】

紀元節 学校は式のみ

望月さん、食糧携へてスキーに出かける。無意(ムイネ)から札幌岳の方に廻るとか。豫科生、一同殆ど終日在舎、勉強に餘念がない。だが我輩は一年の時に較べて試験といふものを痛切に感じなくなった。考へてみると随分図々しくなったものである。なんぼ図々しくても試験の加圧を少しも感じない分には行かず、憂鬱である。然し、試験が済んだ後味は又格別なものがある。そこで、それを楽しみに迎へることゝしよう。

三村さん風邪をひかれて終日床につかれてゐた。

二月十二日

昨日は休みで今日は四時間又明日は休み。試験が近づき皆おそく迄頑張ってゐる様だ。夜九時頃待望の汁粉が出る。コンツなりしも甘味の点で些か であった。

野尻君本日より都合により外泊。 T T

二月十三日【春の近づくのうれしい】

今日は日曜日。朝まだ早いと思って起床したら十時なのには一寸びっくりした。いつもながら日曜日はよくなる。

今日は電車道路の雪が大部解けて水がたまってゐた。雪どけはいやであるが春の近づくのはうれしい。まだ大部寒い日が続くであらうが何ととっても、もう三月まであと半月だ。

豫科の試験がいよいよ近づいたので皆おそく迄猛勉強をやってゐる。試験が終れば帰省出来ると思ふと、つらいやらうれしいやら（ ）

二月十四日 月曜【頭のよい女房は旦那を敷く】

屋根裏に雪どけ水は春の音

顔面蒼白で勉強したって、ドッペル。運は天に任せてのんきにやれ。

何だ天下の豫科ボーイが、一〇点や二〇点稼いで何になる。とは云ふものゝ、清水港とマンデイほど鬼よりこはいものはないらしい。点数貰ひに駆けめぐらん程度にやっておくこと。望月さん風邪の気味、御大切に。賄の小母さんは料理が上手だけど一寸事務的。もっとお母さんらしいといふね。なんと云つても、こんな生活には、家庭的温味が猛缺し勝ちですから。余り智的にギシギシ云はれると卒倒してしまふ。頭のよい女房は旦那を敷く様に賄の小母さんが余り頭のいゝところをみせると學生たる我々、少々煙たくなって、住みにくゝなるかも知れん。無理を云ふのではないが、言葉に柔らかみがあつて……。

でもいゝ小母さんですよ。幸福です。（Y・Y）

二月十五日 火曜 小雪【成功を祈る】

明日から予科生の試験行はる。

予科生、緊張した顔付で食堂に入り、夕飯終るや、さっと室にとぢこもる。時々、ハクションが聞こえる。ストーブをいぢる音も聞える。粉炭で燃えないのだらう。気毒だ。成功を祈る。夜食出る。（本吉）

二月十六日 水 晴【予科試験始まる】

本日より予科試験始まる。範囲は比較的少いので試験にしては気樂である。今日、石炭が配給になったが、粉炭ばかり。五号室では三度も火をつけなほしたが薪がなくなると消えて了ふ。しまひにはしゃくにさわつて来て火は消ゆるにまかせる。他の部屋も同様らしい。たまには寒い所で勉強するのもよいだらう。

試験中、毎晩夜食が出るとの事。小母さんどうも有難う。

十七日【塊炭ごっそり焚くべし】

予科ボーイ、頑張れ、石炭八明日塊炭ごっそり焚くべしだ。寒さの為、二日間コンデ取ったり、あとの三日八、ストーブをうんと焚いて満点取つて呉れ。今晚夜食無し。いさゝか淋しい。予科生諸君必ずやコンディション悪く、明日の試験に影響するんじゃ無いかしら。だが、試験の後の休暇ハ快適ですね。

十八日

明日ハ予科休みらしく食堂で楽しげに語り合ふ声聞えた。小生目下製図に追はれて居る。

十九日 土曜日【グランドホテルで中食を御馳走になる】

今日、教練の教官室に缺席届を出しに行ったら新任の中尉が飯食べに行かうとグランドホテルで中食を御馳走になる。棚からポタ餅の様な話である。戦場歸りで興味ある話を沢山聴かされる話を聞いてみると日本軍は米国兵と戦つてゐるのでなくて鉄と戦つてゐると云ふ感じを受ける。

二十日 日曜日

予科生は昨日が休みで今日、日曜日に試験がある。日曜日の観念改変に一步を進めるものか。三学期の試験は日なたぼっこをしながら仕事をする様なものらしい。試験と云ひながら重々しい苦痛を受けてゐる様子もない。今日は片手間に映画見物に明日に備へる人もある。

二十一日 月曜日【決算】

予科生の試験も終つて休みに入る。

夜、決算。一日食費三十九銭也。近来になく安い。

二十二日 火曜日

予科生は試験終りて悠々してゐる。夜になって、北野、河村、小杉君が歸省。舎はだんだん静かになる。

やがて来たるべき春と共に新鋭の舎生を迎へるための準備期か。

二月二十三日【予科生が五人も歸られた】

予科生が五人も歸られた爲か舎内到つて静かで朝寝をする。午前中、味噌を取りに行く。

昨夜食ひすぎた爲か下痢に苦しめられ、飯がまづいので弱る。

甘いゼンザイが出、一同満足の様子。

石川君歸省さる。

二月二十四日【春の息が掛かった】

朝、岩瀬君歸省。本吉、佐本両君、早朝より飛行場の除雪作業に行かれる。吹雪こそでないが、風は相当強い。漠たる原野の中、さぞ寒いことだらう。受験生がボツボツ札幌にやつて来た様である。昨日アルバイトに出掛ける時、札幌駅頭に受験生を迎へる予科生が数人、名を墨で書いて高く掲げてみた。

段々何だか暖かくなる様に感ぜられる。其処迄、春がしのび足にやつて来てゐる様だ。

鳥も眞冬程貪欲でなくなり、雀の鳴声が特に耳に入る様になった。

“冬来りなば春遠からじ”といふ諺は一冬があけんとする時、長い且陰気な冬を省みて来年の冬に対する一種の悲嘆を喜びの“経験”によつて幾分和らげんとする様に思へる。

東京の早春の宵は懐しい。眞暗な晩でも何となく淡い香が鼻に沁みる。昨年三月、歸省して夜晩く迄、友 - 唯一の友と云はれる者 - と余りの心地よさに窓を開け放して語り合つたあの晩は忘れられない。何処かで桜が咲いてゐた様な気持ちでした。

此頃の余りにも物うい学校の授業で益々面白くなつて来た晩、フトこんな追憶は遣瀨ない気持を一時にもせよ吹飛ばして呉れた。

遣瀨ない気持も春の息が掛かったからなのかも知れぬ。 T . T

二月二十五日【愈々敵間近に】

今日は実によい天気であった。

一日中スキー教練があつたが折柄の天気で雪が融け始め消耗する事甚しい。

夕食はおこわに甘味たっぷりの煮豆。

夕方、マーシャル群島中の二島に於て帝国陸海軍部隊並に軍属六千五百人の二月六日玉砕の報伝はる。愈々敵間近に迫る。 T . T

二月二十六日(土)【決戦非常措置要綱発表】

起きると新雪が相当積もってゐた。もうそろそろ雪も融け始めて良い頃なのに、うんざりした。もう雪が降らなくて早く消へてなくなればよい、まちどほしい。

時局は増々多事多難となり何時空襲を受けるともわからない終に情報局から決戦非常措置要綱発表さる。その中に学徒動員体制の徹底であり、理科系のものは専門に要し軍関係工場、病院に配置され勤労に従事する事となった。我々は何時動員されるかもしれぬ。唯、一日一日を悔ゆる事なき様生活していかなければならないと思う。

賄の叔母さんに対する慰問として夕飯を外でたべた。

九時頃から望月さんの部屋で十二時半までだべった。焼鳥の話から食用蛙、みづづ、いなご、蜜蜂にゆき、そこれら豚の飼育について腹をかゝへてわらった。

二月二十七日 日曜日【舎生は仲々好成绩】

快晴、自分は知らなかったが、本吉君に聞くと雲が一つもなかった相である。小春日和とは秋のよく晴れた日の事ださうであるが、春の今日の様な日を標準にとったものだらう。とにかく気持のよい日だった。

予科生は休暇で皆歸って了ひ、自分だけ柔道練習の為、残ってゐる。然しその練習も本日を以て終り、明日から **フライ**。近い中に歸省するつもり。

本日、予科進級者の成績発表あり。舎生は仲々好成绩をとってゐた。然し成績なんてものは変なものだ。成績順位の上の者が必ずしもよく解ってゐるとも限らない。要は身についた学問が大切である。一夜づけの点取虫的勉強 自分もやってゐるが は時局に対しても申し譯がない。學徒として、自分の地位を自覺すべきである、と自ら自分を責める次第である。時局は逼迫してゐる。何時、如何なる事が起っても動じない心の準備、体の準備が緊要である。菲才を省みず思はず生意気なことを書いてしまった。 乱筆多謝

河瀬記

二十八日【会津寮に出席】

予科生歸省してから大分淋しくなった。今晚又河瀬君歸省する。実科の諸君、十三日よりの試験を前にして猛勉強である。今晚八望月氏、舎を代表して会津寮に出席され、晝食の事について色々協議さる。

本日より一週間、警戒体制に入る。水槽其他の準備に気をつかふ。我々も愈々試験が近いた。

二十九日(火)【燈火管制】

夜、我が公区で燈火管制を行ふ。遮光紙が破れたり、無くなったりして大分不備な点あるに気が付く。

望月、三村両君の後輩の受験生一名来舎す。

三月一日(水)【北大の入學試験】

今日と明日北大の入學試験。

日中は暖くなった。食堂の窓を開けておくことが出来る。軒からは雨の様に雪融の水が落ちる。近年になく積った大雪が時々屋根からドーンと雪崩の様に落ちるのも壮観である。毎年の事乍ら今年は舎内のすがもりは特にひどい。あばら屋の様な感じがすることもある。

三月二日（木）【學校食堂での採食が出来ない】

先日来、全私設寮生が奔走してゐるが、三月一日より私設寮生の學校食堂での採食が出来なくなった。それで今日も歩き廻ってやっと駅前で飯なしのランチにありついた。

休み中とエッセンはつきもので、残留生の唯一の慰めであったのであるが、来るべき新学期に備へ朝夕一合の飯に我慢するのも、烈なる決戦下である。

三月三日（金）

夜、三村君は常会に、望月君は私設寮の晝飯問題で学生ホールに出掛ける。結局我々は四日に一度飯を食べさせて戴けることになった。

三月四日（土）【すがもり】

日毎に甚しくなるすがもりの爲、洗面所の壁が一部落ち出した。三村君と余は午后から夜迄かゝる個処の徹底的な処置を講じた。甲斐あって、あちこちを水びたしにしてゐた雨だれが夜廻って見たら止まってゐた。

おばさんがうどんを煮て労をねぎらってくれる。

望月君スキーに行く。（飯島）

三月五日（日曜日）

小生、午後、奥手稲の小屋から歸る。

三月六日【生菓子の配給】

小生の後輩は本日試験に落ちたことが発表された。小生が来たときはもう歸ったあとだった。

生菓子の配給あり。一人二ヶの配給に舌鼓を打つ。残念なことに小生が四丁目の角で買った途端に二ヶを水溜りに落してしまった。全く悲しい氣持だった。

三月七日（火曜日）

何事もなく過ぎる。晩、鯨肉の大食會を開く。

三月八日（水曜日）

大詔奉戴日。

三月九日

朝、小生、薪の配給店より薪を運ぶ。午後は飯島さんが運んで呉れる。

三月十日（金）

舎は平穩なり。実科試験近付く。春近し。

三月十一日（土）【犬に鯨肉を喰はれた！】

昨夜又犬に鯨肉を喰はれた！

前に一度喰はれてから、今度は嚴重に始末をして、雪中深く埋め雪で固めて置いたのに嗅

出して二、三匹で喰ってゐた。見れば前と同様、赤肉の良い所だけやられてゐる。

昨夜、協議の結果、望月さんに青酸属の毒物を持って来て貰ってコロリ殺る事にした。

今、手近にあり、瓶の中で白い薬が盛んに牙をといでゐる様にも感ぜられる。

三村さんと僕はものものしい姿で鯨肉の中に青酸カリを入れる。

望月さんは今晚から明日にかけて土別へ、又、飯島さんは本日から電気三年目の送別会で江別へ行く。残る者四人皆猛勉強らしく、物音一つ聞えぬ。時々子供の泣声が遠くでポーッと聞える様な気がする。 T . T

三月十二日(日)【幼い頃の自分】

毒を盛った肉は今朝見たらすっかり無くなってゐる。何処で往生を遂げたものやら。

今朝は実にのどかにかすんで、よい天気であった。机によって、二三人の学童が歩いてゐるのを見てゐる中、不意にその一人の顔の中に、幼い頃の自分が郊外で遊んでゐるのが見えた。瞑する事暫暫し、忽然として眼前には白い薄よごれた雪が現はれ、現実の世界の帰り来た。さっき迄の間は、雪は眼中になく、唯一、昼の草原で外の子供と遊んでゐた事だけしか寫らなかつた。

三月十三日(月)【今の受験生は】

学部^に試験も愈々発表になった。

実科は今日から向ふ一週間全部で十三科目もある由。三月は何処も試験試験で日が暮る。本日、予科の吉田先生に街でお会いし、その際の御話で今度先生が口頭試問の試験官となつての感想で「今の受験生は英語が課目にないので常識の様な事迄も知らん。例へば、英語で豪州は何と云ふか、又北米合衆国は何と云ふかと聞いても殆ど全部が知らない」との事にはあきれれる。

三月十四日(火)【知る犬ぞ知る】

毒肉の被害は須田学先生事の家近くの飼犬らしく、三村さんの話によるとあの辺りの奥さん連が「うちの犬が死にましたのよ、うちのは絶対に他人から貰つた物は喰べないですのにネー」とは知る犬ぞ知る。

望月さん歸舎。

三月十五日(水)

予科の合格者発表になる。

試験迄に後四、五日であるがサッパリやるき気がしない。

三月十六日(木)【東京迄二等の切符】

望月さんがや^つてゐるアルバイト先の子供が東京へ試験を受けに行くのであるが望月さんも丁度その頃休みとなるので例の心臓で、一緒に行つて見て上げませうと云つたので向うでは「それではご一緒に参りませう」といふ訳でマンマと東京迄二等の切符をせしめたのには一同大いにヒガム。

明朝七時半の急行で行くとかで今日は望月さんサボつて一生懸命に荷造り、又明日に備へてお洒落をしてゐた。

三月十七日（金）

試験を尻目に望月さん勇んで出掛ける。

三月十八日（土）【猛勉中】

午後八時の急行にて札幌に到着す。最初に雪の多いのにうんざりする。眞暗な道をすべったり、ころびさうになりながら舎にたどりつく。

舎内到着して平穩、実科學部の諸兄も試験の爲猛勉中なり。

三月十九日（日）

昨夜のつかれのためグッスリ眠る。暖い内地から来たばかりなので豫想外に寒さが身にしみるので映畫館に飛込み一日を過す。

三月二十日（月）

実科に諸君今日で試験が終了なので張切つてゐる。小生ひまなのでミトキ館へガラマサどくとのおんき眼鏡を見に行く。夜、本吉君歸省の爲荷物の整理で忙しいらしい。北野君歸舎す。

三月二十一日（火）【映畫びたり】

本吉君、朝の汽車で歸らる。田崎さんの室で駄眠をむさぼり起きたら十二時であった。中央食堂が休業の爲晝食をぬきにして亦平和館へ、エノケンの映畫を見に行く。三日間、映畫びたりで少しあきあきして来た。

草地、河瀬の両君歸舎す。予科明日より學校が始まる。

三月二十二日（水）【予科授業が始まる】

予科授業が始まる。一ヶ月ぶりで七時半に起床、登校。東先生葬儀の爲予科生出席す。學級主任より簡單なる話ありて解散す。

三月二十三日（木）

初めての授業、極めて閑散なり。意味のないことだ。

でも久し振りに皆の顔を見ると何故か馬鹿になつかしい氣がしてならない。路は汚い僕が一番嫌な時節が到来したわけだ。五月六月の新緑を待ち焦がれて居る小杉、河村両君、依然歸り来らず。 R . K

三月二十四日（金）雪

朝からちらちらと小雪が舞ひ、昨日迄の雪融けの泥道をうっすらと蔽い隠した。小生は徴兵検査の旅費を貰つてふところがぼかぼかと暖い、石炭が来て室も暖くなった。今晚、賄の小母さん旅行に出るさうである。

夕飯後おはぎがあつた快適！！

三月二十五日（土）【學生生活最後の試験】

此頃は又さむくなった。夜は風が特に強い。

學生生活最後の試験もやうやう半分終つた。

試験が終ると我々は直ぐ學徒動員で四、五の二ヶ月札幌を離れなければならない。六月以降はどうなるかわからない。ひつようとするとこの日記もつけ終りになるかも知れない。

従って、四月から舎のことは望月君にやって貰うことにした。

今迄到らなかった自分をよく助けて来て下さったことを深く感謝してゐるが、今後も望月君を中心に助け合ひ、舎を愛し舎精神を昂揚されてゆかれんことを切望してゐる。

一寸気が附いた迄に諸兄の反省の資にしたいと思ふが、

食事中に新聞閲読すること、便所の草履をはきかへないこと、廊下を走ったり大きな足音をたてること、歸省前後特に舎の責任者の者に挨拶をしないこと、部屋に舎の食器等を長く放置しておくこと、図書室の本の不整理、借り放し等、極めて些細なことであるが反省していただきたいと思ふ。

理想に到達する前提として、あくまで自己を制するに峻厳であらねばならぬ。これ即ち禁酒、禁煙の精神であると思ふ。學生の特質は理想に燃え、自己反省と思索に精なることである。而して舎はその実現に最も処を得たる環境であらねばならぬと思ふ。

どうかくれぐれも舎の為につくして頂きたい。 飯島

三月二十六日 日曜日【宮部先生の御子様に当る御婦人】

昨晚、賄の小母さん歸舎せり。

今朝天気良し。朝の日光がカーテンを通して気持ちよく輝く。目覚れば九時。

山本君廊下の掃除をさす。随分きれいになった。岩セ、小杉両君八配給品受取に行く。午后から予科生諸君、雪かきを為す。防空対策の為なり。小生、明日試験、試験終了後アルバイトあり。東京方面なり。二ヶ月ほど舎を留守にする。

三時頃、宮部先生の御子様に当る御婦人、一御婦人を連れ来る。舎に新たに入りたき予科一年生あるとの話。北野君、見事な対応振りにて彼の母親たる御婦人に舎のうるハしき様子説明する。

副舎長外出なりき。

戸外、雪次第に解け、水滴の音止まず。

道路悪しきに八閉口。されど“すばらしき五月の候”近きにあり。希望ありてこそ苦しみも又耐へられる。

三月二十七日 月曜

快晴にして、楡梢赫々として燃ゆ。學部の試験もあと二日故、居眠りを廃して精進すべし。三村さん御歸省は明日とのこと。此の寄宿舍は予科の三年目が断然多数を占めてゐるから入舎許可の際、一應の検討を加へ、一年、二年の者の増加を 是れたし。飯の量の適度なるは安堵の胸に来るあり。 以て舎の改善に努力せられんことを希ふ。自己生活の確立が肝要なれば公の生活に包含せられたる個人の立場を明確に認識し、其の活殺の自己に在るを信じて猛進することも肝要なるべし。生意気の言を吐く様なれど愚見申す次第。

河瀬の院

三月二十八日 火曜【心に鍊成を】

今日も亦大部雪がとけてゐる。そんなに暖かでもないのにとっても、やはり時は雪をとかしてゆく物が・・・。

春の訪れも近し事と思ふ。

病院の河瀬も大分元氣の由。例のファイトで全治して退院する日も遠くはあるまい。三村さんがアルバイトの爲、歸省せらる。もっとも時局の嚴さが身に迫っても良いと思はれるのに、生来愚鈍な自分は赤面の至りである。舎の掲示板に示されたる副舎長の言、一々然り。副舎長の權儼さを以て舎生の反省を求むる事は、最も手近かな改善の一方法であると思ふ。恵迪寮では新入生を入れる爲に鍊成會を催してゐるとか。新入生を入れんとしてゐる我が舎に於いて各自、心に鍊成をしてゐるだらうか？ “ 自己を生かす事は自己を或る程度殺す事にあるとは屢々吾々が耳にする所である。此れを云々して文句云ふ奴は、如何にも聞える所は自己内の生活の確立を云つた風に見えるが、その實は、可成悪性のエゴイスティックな考へからではなからうか。

成程、之ふ云ふ舎の生活（特に少人数の）に於いては舎を所謂利用して、所謂自己生活を確立する事は非常に易い事である傾向にある所だ。

自分を反省して、如何に此の点に於いて自分が我儘で且つ、利己的であるかは、本當にはづかしい限りである。要は時局の切迫が吾々に対して作用する “ やむにやまれぬ感情 ” を冷静に各自の生活に取り入れればそれで良いのではなからうか。

舎のアルバイトの類、又自分の目に付いた仕事等、積極的に然も堂々として行き度い物だと、私は考へてゐるのだ。手先の術等、特に責任をのがれんが爲に成すべからずとは、強く強く自分の心に叫びた度い。しりめつれつの文と成つた。自分の心に自分が云つた言葉なのである。

飯の件、澤山食べれるのは良いが、後が心配だ。食べ過ぎてはゐないだらうかと。

飯島さんも近日中にアルバイトに行かれるそうだ。

“ 食生活と自分と云ふ事を考へるとたまらなくすまない感じがする。之は決して舎生活を否定してゐる物ではない。食生活は如何なる本質を有してゐるか云ふ事を知つてゐるも、何かその本質的な物に、ふれる事に積極的でない自分におりおりするのである。

舎生諸君の中にも私と同じ様な考へを持ってゐる人がをられる事と思います。その兄は是非一夜を語り合ひ度い物です。乱文乱筆多謝多謝 康生（北野）

三月二十九日【新人舎生に対する対策を】

舎には何事も変りたることなく一日を送れり。

夜、さらしあんのしる粉に舌づゝみを打つ。

そろそろ街には新丸の姿をみる。うれしさうな彼等の顔、清新の氣を吹きかけて呉れるであらう。飯島さんは試験も了る。學生としての最後のものなる由。ホッとしたであらう。

新聞が朝起きる頃 さんの部室にあるのは何かしら余り氣持良いものでない。

飯がブツブツ云ひ、汁が沸騰してゐるのに食卓に寄りかかつて、否、這う様にして読み耽つてゐるのも余り見た處良い物ではない。

朝は一日の初。迷夢に明けた朝は、特に氣持良い朝を迎へ度い。三月も余す二日、舎も新人舎生に対する対策を協議する必要を認む。

新人舎生に対して入舎早々失望を感じせしめぬ様つとめ度い。どうも面白くない事ばかり書いてしまった。 康生（北野）

三月三十日（木）曇、雪【新丸二名来る】

此処数日間は降雪もなく春の訪れも近いと思ったら今朝は寒く少し降雪あり。

本日、豫科体格検査あり。裸になるとまだ仲々寒い。午前中で授業が終ったので午後より映画をみにゆく。“偉大なる王者”、戦時下の独逸がよくあんな映画が出来るものだと感心。

夜、新入舎の新丸二名来る。共に旭中出身の由。七号室で豫科生のみで自己紹介を行ふ。

三月三十一日（金）

舎内平穏

戸倉入舎

四月一日（土）【徴兵検査】

河村は今日と明日徴兵検査

本朝、飯島さん父君死去の報に接し歸省、

村上、今井入舎、再び七号室で自己紹介。門奈入舎即日歸省。

四月二日（日）

残舎生、大根掘をする。河村と小生は徴兵検査。河村は第二乙種合格。

新丸の宣誓式等行ひ騒ぐ。

四月三日（月）

今日も雪だ。何時になったらすっかり路が乾くのだらう。

小生、徴兵検査で第一乙種合格。

門奈歸舎、佐本君歸舎。

四月四日（火）

やっと暖かくなり出した様である。

昨日迄積もってゐた雪が段々融け出して来て昼過は乾いた地面が見えだした。

大漁を予測されてゐる春の王者、鯁は今に到るも何の音沙汰なし。毎日大根許りでも……

四月五日（水）【豊平館食堂は閉鎖】

共済部の建物が軍用に使用される事となつたので、豊平館食堂は閉鎖となつた。同時に健康相談所も閉鎖。

他に雨天体操場、剣道場も同様とか。

四月六日（木）

新入生歓迎会を来る八日に開く事となつた。石炭が又々大欠乏を来し忙てゝ催促に行くが、何時ともハッキリせず、会が出来るかどうか。

本吉君遅く歸舎。

四月七日（金）

明日の歓迎会の為に餅を搗く。

夜間図書館へ行ったが少し寒い点を除いては勉強出来た。九時の閉館がうらあった。

四月八日(土)【歓迎会】

午後五時より歓迎会。先生方は色々な都合で宮部先生御一人であったが、却って落ち着いた会となった。

先生は札幌農学校時代の学友の思出を自叙伝の原稿に従って話され新生はもとより旧舎生一同大変有益な御話を聞く事が出来た。

四月九日(日)【馬糞風】

日毎に暖くなって来る。電車路も人道の片側は大体雪が融けて了ひ、乾いて来た。これから馬糞風に吹捲くられると思ふと嫌になって了ふ。マスクは可成使用するがよい。

お詫び。小生の不注意で日誌を斯くの如しく永く止まらせて済まん。 T . T

四月十日(月)曇後快晴 【新丸始めての**教練**】どなたか解説お願いします(大川)

花ぐもりではなくて雪曇りの天気も晝近くすっかり恢復。午後のやはらかい日ざしは窓際を訪なふて眠気を催させる。

新丸始めての**教練**、学部と共に倉橋大隊長より**教練**強化に就いての心構へを拝聴。感激、特に新たなるものを覚ゆ。その後 **若手**の中尉に**教**はったが餘りに張切ってみて消耗の極み、夕食の待遠しかった事。四時間**連続**の日は思ひやられる。

舎の 事その他移動

待望の石炭来る。田崎さんの奔走、効を奏し珍しく三級品来り皆至極満悦の体である。六時より總動員で小屋まで運搬。こゝにも總力結集の力強さが感ぜられた。

本吉さん佐本さんアルバイトに出張(一ヶ月間との事)

の加藤君新入舎。これで我が舎も定員だけ揃った様である。益々 満に共同生活のはれる事 るや**切** 石田記

四月十一日【春はもう藻岩のすぐむかうまで】

春のきざしにローンの緑の若芽がそろそろと萌え出し頬をすぎる風も、猫は鼠をとる事を忘れ、人間は借金のある事を忘れ、學生は勉強を忘れる眠たい春の前奏曲をかなでてゐる。居ねむりと、にしんと、馬糞風と郭公とを思ひ出す札幌の春はもう藻岩のすぐむかうまでやって来てゐるのだらう。望月さん帰舎、元気一杯の姿あらはす。 河記

四月十二日【練曇り】

気温、本日よりぐんと上昇し、益々春らしく思はれる時、練曇りの空に應へてか、初練を美味しく皆と食す。全く美味しかった。

今日は何處となく舎全体が活気づいてゐる様に見へた。眠くなる春に一体どうした訳か、矢張り春である。陽気になるのであらう。

ストーブも取り外さねばならない。中旬であらう。

四月十三日(木)晴【秋太刀魚】

朝六時半起床、よい天気だ、日一日と雪が消えてゆくのが目立つ。札幌もいよいよ本当

の春が訪れたといふ感が深い。

朝食は汁気の多いおじや二杯、午前中四時間、教練のある一年生諸君いささか悲壮な顔をしてゐる。こんな事が続いてはたまらない。晝食を寄宿舍でとる。さすがにうまかった。鯿をたべてみると、ふと秋太刀魚の事が思ひ出されて来た。

四月十四日 金曜日【大野さんの独逸語】

今日、四時間目大野さんの独逸語あり。始めてなので（教科書が来て）皆共謀して本を出さないでだべってもらふ事にした。所が先生、皆本を持ってゐて出さないの、ご自分で誰も出してゐないのに独りで訳し出されたので結局、皆にやにやしながら本を出したので大満悦。晝に“すし”にゆくと原先生が居られた。何しろ一、二年級担で顔を覚えて居られるので大急ぎでたべて飛び出して来た。

夜は映画にゆく。

四月十五日（土）【明日の朝は又眞白】

朝おきてみると雪がふってゐた。もうふるまいと思つてゐたら又ふった。春がどこかへ行ってしまった様な感じがした。然しさすがにとけるのも早い。晝になつてもまだちらちらおりて来る。午後の物理実験は寒かった。僕は膨張係数の測定で湯をわかしてゐたので皆あたりに来た。

夜おそくなって本をよんでゐたらぱらぱらと雨の様な音がしたので、見たら眞白く見えた。明日の朝は又眞白いであらう。

四月十六日 日曜日【札幌へ来て始めて見た姿】

先週はやすみがなかつたので何だか久しぶりのやすみの様だ。外は眞白だ。雪どけで又しばらく道がぬかるむであらう。便所へ行った時、外を見ると子供が雪達磨をつくつてゐた。札幌へ来て始めて見た姿だ。何だか東京へ帰つた様な感じがした。然し考へてみると札幌ではこんな時でなくては雪達磨なんか出来ないのだ。スキーの面白さを知る事の出来ない東京の子には雪釣りだの、雪達磨の遊びがある。

今日一日中、何もせずぼんやりくらす。考へるでなし考へないでなし、馬鹿の様な顔をして外を見てみると外の影色が見へたり、見へなかつたり・・・・・・もともとよくない頭が近頃は益々馬鹿になつたらしい。

夕方、林檎の配給あり。

四月十七日 月曜日 晴時々曇【小母さんの嬌聲を聞くのみ】

朝から馬鹿に寒かった。去年の落葉が風にからからと舞ふのを見ると、これから冬になると云ふ錯覚さえ起る。予科では愈々決戦調の時間割が発表された。教練の強化が特に目につく。市の防空演習も最終日を迎へて早朝空襲警報発せらる。小生、夢うつつに小母さんの嬌聲を聞くのみであつた。図書整理あり。 石川

四月十八日 火曜日【家がこひし】

防空演習も終了す。

今夜から石炭の配給が無くなつた故ストーブの使用が禁止さる。日中は左程寒さも身にし

みなかったが、夜、机にむかってみると、足が冷えて、ふと故郷の冬の事を思ひ出し、家がこひしくなった。寒さしのぎに時々、竹刀を振りまわして寒さを吹飛ばす。 岩瀬記

四月十九日 水曜日【この舎のしみじみとした味ひ】

今夜、河瀬徴兵にて歸省との事。一日快晴。午後予科長より、明日より二年目の出発するアルバイトについて、覚悟を促された。ストーブも大方全部とられた。春未だ寒いが、これくらいの寒さは能率向上には却っていゝだらうと瘦我慢？この舎のしみじみとした味ひは木にある。前も後もどこも皆茶色い枝である。梢が青空に揺れてゐるのを見ると何か淡い感傷に打たれる。この木が萌出て、緑となって、白い雲の碧空にくっきりと浮ぶ夏が空想される。寮内の空気が思ひなしか沈み勝なのが氣にかゝる。活氣に満ちた 上練磨の生活が強調されていゝ様な氣がする。 村上記

河瀬徴兵検査の爲め歸省せり。

四月二十日 木曜日

毎日の晴天で (氣)分が良い、予科二年目が続々として聖汗の地に赴く。 の生死懸って我等學徒の雙肩 (にある)。

四月二十日夜、戸倉君検査の爲歸郷さる。

四月二十二日 土曜日【大根先生の應召】

非常にうすらさむい。dunkel な空。晝過には、大根先生の應召によって壮行会が行はれた。彼も又一人の人傑であった。本日夜、山本君が検査の爲歸省される筈である。アルバイトについて諸先生がおどかしをいはれる。勿論、覚悟は十分。夜、飯島さんがお歸りになった。

四月二十三日 日曜日【エゴイストとは】

快晴。朝、大根先生の御見送りを北野君と石川君にすゝめられて、未だ何人の出征にもかくの如き嚴肅にして熱にあふるるものを見ず。彼は最後迄精神的良師であった。感謝す。

一日中農場のアルバイト。卒倒的に消耗。夕方風呂から帰ると途端にねむくなる。今度のアルバイトはもっともつつかれよう。対策如何と考へる中に眠ってしまった。

今日は四月の決算が行はれたさうな。

エゴイストとは「自己の存在と他人に對する想像力の缺乏」してゐる人間と定義されたのを見たことがあつた。自分は常にこの意識に苦しめられてゐる。然し「どんなにひどいしほりかすでも、最後にやっぱり葡萄酒になる。」様にこの寮生活を何年も續ける中に、線の太い逞しい、エネルギッシュなもののはれを持つ、武人的で而も眞理に對する理想の追求者たる人間が生れて来よう。北野君と駁辯るつもりであつたのに眠りに責められて、こゝに記す

暴言多謝 H . M

四月二十四日

月曜日といふ日は調子の出ない日である。なのに寄宿舍の張り切り振りは実に見映へがあ

る。晩は庭の倒木を皆で處置をする。

飯島君は一昨夜来たといふのに、今日は又上京するといふ忙しさだ。それも就職の事であれば只、気の毒ににと思ふ丈だ。

何だか今日は書く気がしない。(望月)

四月二十五日 靖国神社への御神拝の日で講義なし。月日の過るのも早いこと今年ももう五月になってしまふ。

雪解けのうすぎたないのに馬糞風がびゅんびゅん吹いて、全く道路なんてうっかり歩けぬ。今日は庭の倒木のあとかたづけの続きをやる。中々、寄宿舍の周囲は整理がつかぬ。

四月廿六日 水曜日【食堂の窓から】

今朝眼が覚めてみると雨が降ってゐた。自分が札幌に来てから雪には幾回も降られたが雨は初めてなので、何かしら故郷が想ひ出されて懐しく、食堂の窓から道路を洋傘をさして通る人を眺めてゐた。尤も正直に白状すると、洋傘よりもパラソルの方が目を惹いた事は言ふ迄もない。食堂と言へば、近頃では僕が“しんがり”を引き受ける様になった。河瀬氏がゐないので、朝寝の方でもどうやら親方らしい。自慢にはならないが、自分の経に或る程度忠實なのも悪くもなからう。佐本さんが居なくなったので少し舎内が淋しくなった気がする。尤も悪く言へば少し静かになったとも言えない事もないが・・・同感

晝、中央食堂で三回食った、従って鯨を三匹食べた譯、舎の夕飯でも鯨が出ると思つてゐたら、無かったので、幾分落膽もした。鯨はこのところ、一日平均二、三匹は食べてゐる。北海道に来て鯨に対する認識を新にした事は特筆するに價しないかも知れぬが、それ程不味くもない。しかしそれ程甘くもない。 T . I 生

四月二十七日(木)【頑健な人が羨しく】

昨日来扁桃腺の爲寝込んでしまひ、遂に今日は學校も休んでしまった。何と言つても病気はいやなもの。頭は痛い、のどは痛い、學校も休むとなると實際健康、殊に頑健な人が羨しくなる。舎の諸兄にも色々御心配をいただき、殊に北野さん、今井君には御世話になった。雪もすっかり融け、空も青々といよいよ春らしくなってきた。舎の皆さんも勉學に、運動に一層馬力をかけられるだらう。私も諸兄に負けぬよう頑張つて行きたいと思つてゐる。 H . M

四月二十八日(金)【一路故郷へ！】

今日は割合寒い、然し明日、明後日は休みだ。

此んな機会は仲々無い物だ。大いに活用する心算り。村上、石田、平、門奈、加藤の諸兄、それぞれ楽しい夢を抱めて一路故郷へ！羨ましい気持がする。

大いに家の和かさを味つて来て又新しい気持で舎に帰つて来て下さい。夜、飯島さんおかへり。夜、今井兄と“こうしなきろうごく”を見に行く。何度見ても良い。新鮮な鱈が食べ度い物である。 北野

四月二十九日【天長節】

天長節の佳節を謹みて、ことほぎ。

代々木では観兵式が催される筈。

舎は多数の諸君が、或はアルバイトに、或は帰省に舎を離れてゐる爲、気が抜けた様だ。

ひるは飯島様がグランドホテルで舎生に晝食をふるまふ。夜七時より理事会あり。

“ 格子なきらう城 ” 見物に行く者有り。

他に変わったことなし。 北野

四月三十日（日）

四月も、もう終りと云ふのに、昨夜からすつとうすら寒い。

午前九時から正午迄材料力学の補講あり。

戸倉君帰舎、第三乙種合格との事。

望月さん、今日室蘭へ向け実習の為発つ。

夜晩く村上、平の両君帰舎、門奈君帰舎。 T . T

五月一日（月）

朝、石田君帰舎

飯島さん、明日より動員に参加

やっと暖かくなり、さてこそ五月を思はせると云ふ天候であるが、余りパツとせず。

鯨曇りといふ奴か

河瀬君帰舎 T . T

五月二日（火）【ego の集合】

朝から風が吹き曇がちである。徴兵帰省の顔ぶれも揃ひ、又舎生活が始まる。舎の 満な運営はどこまで舎生の精神的要素に俟つ所大であると思ふ。一人一人が自己に固執し、他を (るく) 度量に乏しいなら、たとへそれが ego の集合とはいはなくても、あり来りの合宿と何等変らない。最近、舎の方々が快活になって下さったのは本当に愉快的事と思つてゐる。舎をよりよくする事は決して食堂で飯を食ふ事でもなければ、勉強に熱中してゐる時だけのものでもない(詭辯か?)

それを望むなら下宿した方がましだ。此の我舎が一般に珍らしい特殊の生活だけに自分の生涯に於て最も有効な時としたいと思つてゐる。

勝手な熱を吹いて恐縮 I、記

五月三日（水）

雨上がりの快晴、全く気分のよい朝であった。豫科、醫類一年アルバイト。小母さん頭痛のため寝られ、夕食は石田君の努力による。多謝。

五月四日（木）【植物園の芝生の緑】

今日も快適に晴れた。本当に気分のよい日であった。植物園の芝生の緑も日に日に増してゆく。木にも芽が見えだしたものもある。

學部の人居られないため何か物足りないものを感じる。何故か淋しくてやり切れない。舎生活に於ける自分を考えると済まない気で一杯であるが……。

此の頃は専ら本を読むことにして居ます。

文よめば心慰むさはあれど文よむのみぞ余り淋しき K 生

五月五日【隣保車】

待望の隣保車とやら云ふものを購入し草地君と二人で配給の薪を眞新しい車を曳いていとも颯爽と取りに行ったが車がガタガタするので薪がすぐ落ちてしまひ雨にビショビショになり苦心慘タンしてやうやくたどりつく。

五月六日

朝の内は日が照ってゐるのだが日中になると雲にかくれてしまひ五月といふのにかなり寒い。近頃は夕食後にピンポンが流行り出したやうであるが、小生ピンポンはどうも苦手でピンポンの音がしても出て行ってやる気がしない。 河瀬記

五月七日(日)【ピンポン大流行】

天気が悪かった爲か終日ピンポンで暮した者が多かった。若しも快適な晴天だったらピンポン等には誰も見向きもしないからう。ピンポン大流行の爲に若手の新人が物凄い上達振りを示してゐる。近い内に東西両側の対抗試合が行はれる由。徴兵検査で本吉さんアルバイトから帰り、忽ちピンポンに於ける無敵振り發揮す。 平記

五月八日(月) 曇【分隊長】

本日は大詔奉戴日、朝、北野君と奉読式に参列して登校。第一時限、石塚先生の補講あり。前線に於ける体験、帰還してからの銃後の生活の感想等いろいろの御話あり。第二 - 四時限教練、分隊長に当る。人のを見てみると簡單の様だが、いざ自分がやってみるとなかなかむつかしい。

加藤君徴兵検査終へて帰舎さる。第二乙種合格との事、御土産あり一同おいしくいただいた。(K)

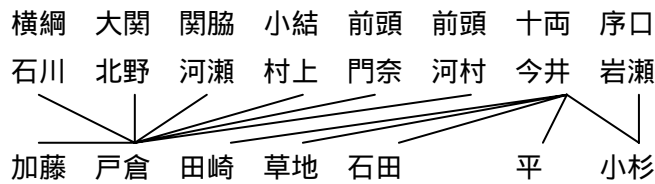
五月九日(火) 薄曇【ピンポン大会】

市内の空地と云ふ空地が片っぱしから畑や防空壕に変はるのに刺激されて、舎でも裏の畑を耕す。半分ばかり耕したものの肥料や作物について頼もしい議論百出、終に実科の權威方の歸舎を待つて指導を仰がんとす。

ずも舎生總出大ピンポン大会開かる。我軍の十両豆タンク今井君の奮戦物凄く、五人を抜けば、敵の副将大関戸倉君憤然立って豆タンクを撃破するや餘勢を駆って抜きも抜いたり我軍全滅、更に自軍の横綱加藤君をも破って合計八人！！つらつら思ふに勝ち始めると負けないものらしい？参考の爲戦績を記載す

終了後、小母さんの気転により大豆のいったのと甘酒が出る。愉快なる夜なりき。

本吉君甲種合格、今晚再びアルバイトの地へ出掛けた。



五月十日 水曜日

今朝は一週間振りで腹の工合が良くなったので、何となくほがらかった。

河瀬君、午後より出張し、へ行かれた。今夜は宿泊するとの事。

夕食後、相変わらずピンポンの音がしてゐた。

五月十一日 木曜日

佐本、本吉両君、アルバイトより帰る。御苦勞様。ピンポンが今日も流行ってゐる。意識 自我が僕を苦しめる。近頃の宇野さんの講義の様だ。芝の緑が目にしみて、朝の鳥の囀りも嬉しい。 H . M

五月十二日 金曜日(晴)【ローンが時局に則して南瓜畑】

一ヶ月振りで学校に出てみる。特に目についたのはあの伝統を誇るローンが時局に則して南瓜畑や馬鈴薯畑に変わりつゝある事であった。時局の力の偉大さを感じらる。夕方、近所の子供達とバレーをやる。子供の様な童心を持ちたい!! E . M

五月十三日 土曜日【寮歌練習】

朝、雨降りしがすぐ晴る。明日、体錬大会なので心配だったがこの調子ではありさうだ。雨降りて後の芝生も見事なものだ。何かしら溢るゝ許りの新鮮味を感じず。夕食後寮歌練習に楽しき一時を過す。

五月十四日【ストーム】

晴天、櫻は満開、大學構内到着所、きれいな花も開いて吾らの目をたのしませてくれる。予科は運動会あり。類對抗で各々大いに敢闘した。成績順位は農医工理の順、後寮歌祭あり。各類毎に歌ふ。後にストームの代用品のやうな事が行はれた。即ち、舎生徒が肩を組み円陣をつくって“藻岩の緑”を歌ひながら廻る。何のことはない、ストームと同じやうなものだ。文部省からストームが禁止された爲に、その代りにこんな事が行はれ學校からも認められた。こんな事をしたのでは、ストームと変りはない様で、禁止された意義も薄くなるのではないか。その事たるやストームに於ける如き感激は得られない。自分には何故にストームが禁止されねばならなかったか理解できない。とにかくストームが禁止されて出来ないならば、“気のぬけたストーム”とでも云ひたいやうな今日のやうな事は却ってしない方が良いやうに思った。

飯島副舎長が歸られた。もうすぐ仙台の内務省上木出張所へ就職のため出発されるとの事。名残も惜しきこと限りなし。(河瀬)

五月十五日 月 晴

晴天の日が続く。ポカポカ暖い。舎では毎日、夕食前後ピンポンの音がする。

門奈君徴兵検査より歸る。 “河瀬”

五月十六日 火 風強し【丙種合格】

今井君十四日来の発熱で相當に參つてゐるので共に病院に行く。ハシカとの事で二、三日様子を見るとの事だ。

何時の間にか櫻が咲き落葉が緑になった。眠つてゐたような自然もやはり活動を怠つてはゐなかつたのだ。落葉の美しい薄緑り、薄紅の櫻花、何か教えられるような気がする。

兵隊検査が終つたが、その結果を問ねられるのが僕にはつらい。丙種合格とは思はなかつただけに強く悲觀する。とても「丙種です」とは答へられない。然し未だ未だ道はある。体、殊に眼を治してお召しの日を待たう。 門奈

五月十七日 水【皆んな元気に成らう】

門奈君身体の調子悪いとかで帰省、淋しい。すまない様な気がする。一日も早く元気に成つて一緒に暮せる日を待ち祈ります。今井君はハシカとか、元気ない。又戸倉君も眼がいたむとか病院にゆくとか、どうしようかと思案してゐるらしい。何だか頼りなく淋しい。他に変わった事なし。皆んな元気に成らう - 大分感傷的に成つた。

五月十八日 木

私はアルバイトに、戸倉君病院に眼を見てもらいに行くが大した事はないらしい。今井君やうやく元氣らしく成つた。吾等の豆タンクと呼ばれる様に早く成つてくれ。

風呂へ行ったら振られて、仕方なく學校の近くの風呂へ行って来た。 北野

五月十九日【時間にケジメ】

昨日から少し風邪をひいて今日のアルバイトは休んだ。

三村さんは廿日頃帰舎の予定と便りがあった。我々は今少し時間にケジメをつける必要がないだらうか。遊ぶ時は徹底して遊び、一度定められた時間が過ぎればサッと止める事が出来るだけの自律が大切であると思ふ。

「時間厳守と自律節制が最も強く要求されてゐるのは軍隊と禪寺だ」と或教授が送別会の席上述べられたが同感である。それが學生の間に於て要求されないでよいと云ふ事はあり得ない。 T . T

五月二十日 土

今日も昨日と同様大変寒い日である。午後一時半から中央講堂で映画“轟沈”があった。我々の組の代表の交渉うまく効を奏して午後の実験の時間は休講となり觀覽する事が出来た。

夜も非常に寒い。又明日から晴天の日の續くのを念じつゝ早く寝につく。 加藤

五月二十一日(日)【無爲には過ごすまい】

曇模様後雨降る。二週間に一日の休日、無爲には過ごすまいと色々考へたが結局何もせずポカント一日を過ごして了つた。此頃はピンポンが大流行だ十時近くまでも爲してゐた者もゐる様だ。

石田君徴兵検査のため午前十時半の汽車にて帰郷す。

五月二十二日（月）

朝、三村さん帰って来らる。相変らず元気な顔をして居られるのは頼もしい限りである。山本君も帰舎、充分に食溜めて来たと見えて物凄く張切って居る。これから少しは騒になることであらう。

五月二十三日（火）【ゲミュートリッヒな気分】

快晴、一昨日昨日の寒さも漸く去り再び暖かくなった。暖かくなると眠くなるものらしい。今日の授業は眠くて致し方なかった。

六時より飯島さんの送別会を開く。宮部先生、風邪のため御缺席、亀井先生のみ来らる。東先生の所謂ゲミュートリッヒな気分を以って終始する。警防の係がうるさく云ふので閉会后玄関前水槽に水を汲み入れる。

五月二十四日

快晴、少し運動すると汗が出る位の暑さになって来た。物凄い馬糞風！舎に変わったことなし。 R . K

五月二十五日【大きくみのれ南瓜の子】

實によい天気であるこの春といふのに予科三年目試験に近づく。今日あたりになってようやく懸命になってノートを見るも。もっとも小生が懸命になるといっても大したものではないが。

駄句二つ

登校の途中に

小供らの小魚とり居り水ぬるむ春

南瓜の種子を植えて

夏の日に大きくみのれ南瓜の子

河瀬記

五月二十六日【】

待望の砂糖配給あり、夜早速お汁粉が出る。とてもうまく感激す。田崎さん大分容態よろしくないやうで心配である。

舎生諸兄君、田崎さんの爲、御加禱あらんことを。

五月二十七日【別れと云ふものは兎角物憂いもの】

海軍記念日思ひ出深き日露役大勝を懐古し、益々敵撃滅に進まねばならない。

本日遂に吾等の副舎長飯島さん舎を去られ、朝七時半の急行で仙台の方へ行かれる。別れと云ふものは兎角物憂いものである。以後は望月さんを中心として立派にやっで行かう。

二、三日来よりの田崎さんの病氣未だ釋然たらず、病名さへも明確でないとのこと。舎生一同、田崎さん全快一日も速かならんと祈られる。

石田徴兵検査より帰る。甲種合格との事。

五月二十八日【】

日曜日全くの快晴。植物園は人で埋って居た様だ。市中を歩いても全く非常な人出である。併し予科三年目は予科最後の試験が明日より三日間行はれると云ふので全く外の快晴を悲壮な氣持で眺め乍ら猛勉である。試験が終れば、六月一日から一年目と交代してすぐアルバイトである。

五月二十九日【大農學博士の卵連中よ奮起せよ】

小秋日和。も遣り場に固る様子。でも 下りの陽光は馬糞風 中に背筋までしみる。北野氏、醫學部轉入拒絶さる。振り返れば余り朗らかでなく寝てばかり。山本氏父帯札。

(来舎)

アツ玉砕の日、国民有志 敬事奮起すべし。然して三年目諸君よ誰も無駄な玉砕をせよと叫ばなかった筈。最後の試験故全精力を發揮し給へ。文科系朋友は一日の休みなき戦場にあり。田崎氏依然臥床、されど二、三日より健康色なる様子。飯島副舎長、そろそろ實習につかれたところか。舎生一同つゝがなき御成功を祈る。舎の前の南瓜は降雨なき故かさっぱり芽を出さぬな。大農學博士の卵連中よ奮起せよ。自分は正直なることも更に銘記せられ度し。

五月三十日 火 晴【学部進入の願書をか】

朝五時起床試験なればこそ我ながら珍しい事だ、八時頃迄勉強する。若葉をみての勉強はさすがすがしいものだ。

今日の外国語も動物も比較的容易だったので一安心。帰舎して二時間程晝寝をする。それから最後の一ふんばりと勉強を始める。ふと思ひ出して学部進入の願書をか。之で自分の一生の行先が決定するのと思ふと一寸嚴肅な氣がした。一時頃就寢

五月三十一日 水 晴【明日からは勤勞作業だ】

愈々今日が餘科最後の試験であるが、さっぱり試験らしい感じがしない。十一時三十分遂に終った。急ぎ學部入願書を提出し、歸舎後ポーとして何等なすなく一日を浪費す。明日からは勤勞作業だ。身体の調子も良好なり、大いに張切ってやる覺悟だ。

六月一日 木【小雨の中に一日中坐ってゐる】

雨の音に眼がさめた。大したこともなささうだ。この雨の中で作業をするかと思ふとウンザリする。作業は用具の配給と説明で一日を過ごした。小雨の中に一日中坐ってゐるのは暢気なものだった。完成を急いでゐるのに、勞働力を更に有利に使用したら良ささうなものだ。夜、映畫へ行く。さっぱり面白くないつまらぬものだった。

六月二日 金【少々癡猛に働過ぎ】

三年目アルバイト二日目、昨日に引続いた陰鬱なお天気であったが、作業には暑くなく寒くなく適當な日であった。初日として少々癡猛に働過ぎ、大分消耗した。早寝以って明日に備えんとす。

六月三日【今八退舎の氣持で札幌を立つ】

二十七日飯島さんが退舎して仙台へ向ったが小生も愈々明日四日、札幌を離れて室蘭に向ふ事になった。アルバイト八明年三月迄であるが其後歸學する様になれば再び歸舎出来る

かも知れない。が、兎角、今八退舎の氣持で札幌を立つ。昭和十五年四月に入舎以来まる四ヶ年の舎生活八如何に自分を啓發して呉れた事か。そして又楽しい、苦しい思での數々八、札幌即学生々活を總て舎生活の中に求めて来た自分に取って八果しない追憶の泉となつて湧き上がって来る。入舎当時色々叱声や指導を仰いだ先輩八、もう既に一人も札幌に八居ない。やがて又自分も札幌を離れる　　々たる。時の流れに萬物八流轉することを切實に感じる。然し今や、舎に八新たなる決意の下に多数の新入舎生の諸君が来られた。元氣で奮闘される様祈って止みません。　三村

六月四日　日曜日　雨　佐本【この先輩に負けぬやう】

三号室にゐた三村さんの退舎を三号室と一緒に暮した私が書くやうになったのは奇しき縁であると思ひます。三村さんは前副舎長、飯島さんより一年後輩、田崎さんより一年先輩である。昨年の副舎長、菅沼さんが卒業されるとすぐ飯島さんが後を継がれ、そして望月さんを入れて、飯島さん、三村さんの三人及び田崎さんと四人が今日まで舎の柱、そして進んで来た。その間、諸兄も御存知の通り三村さんはあの明朗さと人一倍秀れた頭脳の冴えを以って副舎長の女房役として、小母さんとの交渉、對内的、對外的に縦横に活躍されたのである。斯う書けば極めて普遍的のごあいさつに聞えるやうだが知る人ぞ知るで決してこの言葉が誇大でもなんでもなことを立證して呉れる人はきっと三村さんをよく知つてゐる人のすべてであらう。此の間もこんなことがあつた。愈々室蘭へアルバイトに出勤するの発表あつてからの事である。荷造りで多忙の時であつた。たまたま味噌、醤油の配給があつた。私は之を取って来ることになつて、出掛けんとするとき、三村さんは是非自分も行かせて呉れ、此の頃は舎の事を何もしてないから、せめて配給ものでもと例の明朗さを以って行かうとする。再三お止めしたが、たつてと云ふので、それではと五月晴の札幌の街をあの木製の車を曳いて狸小路を経て配給店へと急いだのであつた。白い帽子の三村さんに私はつくづく敬服したのであつた。今はすでに室蘭の空に夢むすんでゐるであらう三村さんを。人柄を省みて吾々も亦この先輩に負けぬやう、その身相応に張り切らう。北野君は夕張の門奈君を訪れたのは昨日であつたが未だ歸舎せぬ。(日記をつけて記名せぬ者あり、漢字で書くことを切望する、併せて日附の下に記名するやうにしては如何?・・・)

佐本

六月五日　月曜日　曇【種子を二晝夜浸した事】

朝、小雨模様なれど後晴れる。

雨降りは我々を陰鬱にさせる、然しこれが農作物に対し如何程の好影響を与へてゐるか知れぬ。今夜、特に蛙の鳴く声が耳につく。

近頃、日記に天候、姓名を記入せぬ者ありとあるが、僕もそう思はれる。記入する事が團體生活上特に必要である様に思はれる。

氏の南瓜さっぱり発芽せぬとあつたが、これは舎前のクルミの枝の切口から滴れる樹液中に種子を浸して、はたしてこれが水に浸すのと異なるか否かを面白半分で行つてみたものであります。発芽しなかつたのは樹液中、無機物の余りにも過剰に存在したため呼

吸作用の困難なためか、又、少量の液に多くの種子を二晝夜浸した事（水では一晝夜程度）が原因してゐると思はれる。何れにしてもルーズにやった事が最大の原因であります。

本吉

六月六日 火曜日 晴【全く天國だ！！】

朝日を受けて胡瓜の樹が部屋に陰をなげるのは何とも云はれないものである。

我々の寄宿舎の生活が先づこのすがすがしい贈物により始まる全く天國だ！！

田崎さん大分よくなられ少し少し起きておられる様である。早く全快せられん事を心から祈る。（本吉）

六月七日 水曜日 晴（村上）【予科三年のアルバイトは】

「アルバイト」予科三年のアルバイトはファイトがすごい。然し、時々集合や寮歌の事などで分隊長が叱られてゐる。

飯島さんが近日お出でになさるさう。実にうれしい。

加藤君が七 - 九日迄臨海実習で外泊される。

本日第二戦線の発表があった。卒倒。ドイツも苦戦。だがあの優秀な民族は惜しい。

田崎さんは全くよくなられた様子です。

終り

六月八日（晴後雨）【面白き團樂の一刻】

今日は大詔奉戴日に應はしく快天気であったが十時頃からしょぼしょぼ降り出し、今は本降りである。お蔭様で今日も又田口教官の下らない軍事講話があった。朝八時の汽車で飯島さん来舎された。陸軍の短現受験の爲ださうである。夕食後飯島さんの現場の体験談あり、面白き團樂の一刻を過す。

六月九日 曇後晴 河瀬登【もっと前に親しく御話を】

雨が降るかと思つてゐたが天気になって了つた。三年目（予科）のアルバイトも三分の一は終らんとしてゐる。

飯島さん短現の試験を終り、二十一時四十分発の列車で歸られた。これでもう飯島さんと御会ひすることもないかも知れないと思ふと、誠にさびしい。もっと前に親しく御話を御伺ひしておかなかつたことを残念に思ふ。

六月十日【三時間単位の教練が一日置きに】

今日は土曜日、明日は久し振りで休みだと思ふと何となく気が軽い。予科の日曜授業は成程この時局柄時間を有効に使はうとする意向は適はしくもあり、敬服すべき点もあるが、その爲に却つて氣分的の餘裕を失つて、その結果、ファイトが缺け、非能率的に陥るのではあるまいか……。尤もこれは小生の如き、先天的怠慢性の者の言、そして諸兄より一蹴されても何等不思議でないかもしれぬ。三時間単位の教練が一日置きにあるので、体も疲勞し勉強する氣が減少する。某高校の如く、一週に一日朝から晩までやったら如何。さうすれば教官諸氏も氣分的、肉体的にも、責任遂行の満足を得られるのではあるまいか。夜は帝國座で“さすらひ”を見た。扨、明日は如何に過さうか。（妄言多謝） 今井

六月十一日 晴 日曜【みんなのんびりする】

学校の授業もアルバイトも休ミ。みんなのんびりする。朝、防空壕掘りをした者有り。小生終知らず不参加。部屋の掃除を久し振りでした、ノミトリ粉、ナフタリンをまく。部屋が一種特有のほびと呈す。他に大掃除をせる者も有った様だ。かくして一日は過ぎたり・・・。本當にやらうと思ったこともせず、寝てくらし。後味大変悪し。明日からのアルバイトに又頑張ろう。 北野

六月十二日 月【唯々感謝】

此頃の天気は全く不順である。今日も朝から寒さうな空模様である。

今日久しぶりに登校、病中諸兄の御友情に対しては唯々感謝してみます。

矢張登校すると少々疲れる為に、今迄余り椅子に坐った事がなく、病気で六キロ近くも減ったので相当肉がうすくなったせいか、木の腰掛に坐って二時間も講義を聞くのは相当こたへる様である。

足の発疹は未だ引かず些か気になる。

六月十三日(火)晴

今日は朝から良い天気だ、夕食前の一とき、久し振りにピンポンの音がする。夕食後、本吉さん、今井君と三人で風呂へ行ってくる。石鹸がだんだん瘠せてくるのを見ると実に心細い。(加藤)

六月十四日 晴

小生は終日アルバイト、貨物にての運搬なるも感情を害すること多くて面白からず、遂に皆と監督との間に一大衝突起り、組つかんばかりの喧嘩をする。

夕方七時より中央講堂にて春季大演奏会あり。夜九時頃より涌声聞こえ始む。(草地)

六月十五日 曇【机上の鈴蘭がほのかに】

札幌神社祭、二時間でフライとなり、一同快哉を叫ぶ。一日中今にも泣き出しさうな天氣のまゝ遂ひに持ち續けた。午後連立って神社参拜。白いものが相当目立つ時期となった。Yさんが一人黙々、待避壕を掘り、畑に肥料をやって居られる様子を見て感激した。自分の餘りに怠慢な姿をみぢめに思はざるを得なかった。夜は小母さんの心盡し・・・牡丹餅である・・・快適、その上アルバイトの人澤山、飯を持ち歸られ、久振りの volume の多きに卒倒す。机上の鈴蘭がほのかに匂ってゐる。

六月十六日【B29 と B24】

北九州、敵機に襲はる。約二十機 B29 と B24 で来たらしい。東はマリアナ諸島に來襲、西欧戦線とともに考へ、我等理科學徒、起たざるべからず！！との感深し。 河瀬記

六月十七日 平記【當に学徒蹶起の時】

昨日の大本営発表後の今日一日、深い沈黙の内に暮れた。當に学徒蹶起の時である。

本日、予科一年目待望の援農、二十四日から二週間と発表さる。今度のアルバイトは移動証明書必要との事なり。

現今の戦局に処して吾等学徒は只、黙々と国家が与へた課題に対し積極的に本分達成に

励進すればよいものと信ずる。併し、已むに止まれぬ熱情より己の信ずる方面に進むのもよい。それが最もよいであらう。学徒は矢張り学徒である。本分達成が最も重大なる要務ではなからうかと思ふ。

六月十八日 日曜日【保樹保葉の深きかげは】

作業がないので朝飯時のせはしさもない。三年生はファイトの發揮場所を求めて何処に突入して行ったやら。晝飯時はとんと居らぬ。白菜の浅漬は淡白にして味なけれど、かゝる夏の陽さんさんと葉間にそゞぐ日はまたなき涼味をさそふものにや。今井氏は圓 策に何等かの思索に耽り、得るところありし様子。寿年の徴たる深き思索の態度こそ望ましい。保樹保葉の深きかげは我等に諭す。初夏こそは寿年學徒を表象する時である。門奈氏帰舎、一層の保健、保養を望む。望月氏帰舎、ご苦勞様。

六月十九日 月【アイネ・リーベ】

陽気のせい、教練教官の馬鹿に気嫌が良いこと。サテハビール特配！！
門奈氏、身体保健、保養を要するため、中ノ島に移る。夜、挨拶をする氏のひよろ長い影がもっとずんぐり太々なることを望む。北野氏曰く「アイネ・リーベを喪った様だ、折角計畫した新生活もフイになった」と慨嘆久し。望月氏、舎長宮部先生宅を訪問、舎長より副舎長を（託）たれたとか。氏の御健闘は我等舎生の意氣と（実行）の如何にある。賄の小母様に対する舎生の態度も此の機を逸せず、轉換すべきだ。不平不満を内に蔵さず、私生活、個我修養を舎に対する奉仕てふぶる（吾）の精神もて、廣き舞台、視野に立って完成されることを望むや切なるものがある。御飯を焚いてもらふだけで有難いこと故、文句は無用のことなり。佐本

六月二十日（火）【我等學徒の手でなった飛行場から】

アルバイトも今日で二十日目、工事も大部進んで来た。板敷ももう始る。我等學徒の手でなった飛行場から敵撃滅の戦闘機が爆撃機が飛び立つ日も遠くはあるまい。

今日は皆で元気よく板を切って三千五百枚つくった。一日の漁戦果を積上げて一同にっこり。実科は査閲があった。我々は二十二日頃アルバイトを査閲するさうである。

夜、決算あり。

六月二十一日（水）曇【防空演習始まる】

作業は皆消耗し始めて来た様である。この戦局を見聞きすれば奮起せざるを得ない筈なのだが。公区では本日より防空演習始まる。朝から警防団の人が来てうるさかったさうだ。併し寄宿舎は演習の除外例となる。夜は燈火管制、防空幕を下しては暑苦しいとて開けっぱなしで寝ることにしたら九時頃警報解除となる。（ ）

六月二十二日 木 晴【気抜けがして消耗す】

本日は予科の教練査閲があるので一年は七時に集合の爲か朝早くから騒々しかった。三年は作業の現場にて査閲するためいたってのんびりしてゐた。我々は午前中は大いに英気を養ひ査閲の間中頑張ったが、査閲官は車中にて通過してしまったので気抜けがして消耗す。

サイパン島の戦闘並に激烈になるらしい。我が海軍の戦果が期待される。

六月二十三日 金曜日 快晴 佐本記【之を更新と云ふ】

戦局はますます樂觀をゆるせぬ。中部太平洋で聯合艦隊が米國大機動部隊を捕捉、戦果を上げたがまだ戦局を動かすに到らぬ。益々深刻なものあり。

予科一年アルバイトに出発、石田、平、戸倉の三人。今井は明晩。

そろそろ夏らしくなって来た。体もだれがちになる頃だ。勉強には苦手な季節。機を逸せず体練にはげむべしである。又、精神の緊張に心掛けねば遂脱線す。気温が上昇してぼーとするためであらう。リンゴの木でもあまり古くなると若い枝と切替をする。之を更新と云ふ。家畜でもその品種の特徴を失ふに到ると血液更新なるものを行ふ。我々もあので、このてで精神の緊張を促すべしで、そのて（方法）には各人各様であらうが、私は先人のとくに科学者の傳記などを読んではその糧にするのもよいと経験してゐる。望月さん、本吉君と三人でミソ、醤油の配給をとりゆく。今日は學校で農産製造實習で「宇どん」を作る。原料は小麦粉と水と云ふから、まじりものなしでその弾力性、歯ざはりには舍の皆にみせたいばかり。一云以て、吾々の學校におけるの一端を御紹介まで。

六月二十四日 土曜日 快晴【援農トシテ出発】

今日も日本晴！！コウ日輝バカリ続クト農作物ノ生育モ氣ニカカル。敵又モヤ大機動船隊デ硫黄島ヲ爆撃ス。我々ハ心ヲ広クモッテ学徒ノナスベキ事ヲ考ヘルベキダ。

今井君、本日夕方帯広方面へ援農トシテ出発ス、健闘ライノル。（本吉）

六月二十五日 日曜日 村上

今日は朝、河村君が支笏湖へ出発された。やゝうすら寒い位。一年目も居ず、稍さびしい。近頃独學のものをよみはじめ。

六月二十六日

舎内平穩

六月二十七日【生き甲斐のある世に生れ合はせたことに感謝す】

別に特記すべきこともなし。寄宿舎を離れて四十五日室蘭の日鉄で醫者修業をして来た。帰って見た札幌の感じは何といふ素晴らしさではなかった。日鉄の構内と言えば二六時中煤煙は、たへたことなく、その煤煙が眼中に入る。だい分汗にべっとりとつく、実に地獄然としてゐた。成る程病院は社宅の区域にあり、山にも近い方にあるとはいへ、見る景物はといへば戦場ともいへる工場の煙突。それに自然の味は新しく社宅の建てられた土地で別に物さびれた新開地である。私は札幌の自然の美し亭々として天に聳ゆるポプラ鬱蒼と繁茂するアカダモ、さてはビロードの様に広く伸び広がってゐるローン、しかもそれが私の留守の間にそんなに立派になったんだから感激も一層倍である。

私の行かされた所は産業工場の病院であり、産業医学を目下大々的に実現させんとしてゐる舞台場である。産業醫人になった私はそこでは主に内科的な診療をやった。毎日毎日、外来に出ては診断をつけた（余り學生にはこんな方には行かせなかったが）所見をカルテに書き、投薬注射をやる。そして入院患者を受け持たされて検査をやり、治療を施す。

私はこの四十五日間一人前の醫者になりきって患者を見た。が私は、こんな診療に退屈さを覚へ然も學問的知識の零細なことを知った時には、もう居たたまれない感情に支配された。内科的検査法を一通り知り、一般的治療法を知った時、もうそれ以上患者の病理、生理状態に、くひこむことが出来なくなつてゐた。今回の動員で知ったことの一つは、実に通り一遍の開業醫にはなりたくないと言ふことだった。

大東亜十億の民を慰める賢人、然らずんば純然たる醫學者か政治家か學者になるのならなりたと思ふ。生き甲斐のある世に生れ合はせたことに感謝す。（望月記）

六月二十八日【舎内の事どもを上手に切捌いて呉れる人を】

寄宿舍内外の整備整頓といふことは中々うまくない。近頃舎生のアルバイトに依つて便所、廊下、食堂が磨きをかけられてゐることは、実に有難い。然、自分は何時迄も舎生諸君にかゝる勤勞を提供して呉れる様にお願ひする訳にも行かず、此所に必然的に賄婦交換の問題が浮び上がつて来る。舎生の斯る勤勞に感謝の念を持ち、自らを鞭撻して、舎内の事どもを上手に切捌いて呉れる人を吾々は心から待つてゐる。

桑島、勝美といふ二人の未亡人の心理に吾々舎生は接觸する機會は持ったが、その不可解な心理を觀破し徹することは出来なかつた。一人の女が主人を失つて、子供を抱へて世の荒波に直接ぶつかつて行かねばならなくなると、彼女は女といふ生來の柔和な性質にもまして自分自身が自らを片身の狭いものと思ひ、又世間から嫌惡の心を見られてゐると假想して、その反動で自分を誇大視する傾向が強かつたり又子供 - 自分の子供 - からも馬鹿されることを恐れて、子供をうんと叱つたりする。然もこんな傾向は賄婦といった職業に直接入らんとする勝氣な女に多い。それかあらぬか、未亡人はヒステリー様な精神症状となる。（それかあらぬかと記したのはこゝに性慾の問題、遺伝性體質を考えねばならぬからである。）小生の考へでは賄婦には未亡人はもう充分である。夫婦者の方が嬉しい。

六月二十九日【財団法人としての登記】

昨年迄は今頃になると暑中休暇で浮足たつてゐたのに、今年は何とそれ所か勤勞奉仕の連続で悠々と學期試験の勉強もなく、正に多忙である。

寄宿舍の財団法人としての登記もやつとの事で可能になつて来た。

村上君、祖母の死に逢ひ、歸省される。（晩）

六月三十日

別に何もなく過ぎる。

七月一日。勝美の小母さんが用件があつて本日より二日の予定で旭川に行かれる。晩に舎生會を開催し、舎生に賄婦退舎の意志を傳へる以上、氣不味い思ひで暮すよりも積極的に小母さんを探す方が良いと思ふ旨を告げる。舎生諸君の自炊には感謝する。北野君「外泊」二日間。

七月二日

昨日よりの防空演習があると聞きしが大したこともなく日曜日一日を舎のエッセンを自炊して行くのに手一杯だったことを謝す。

七月三日【南方諸地域の激戦は】

六月二十日来サイパン島敵機来襲を巡って南方諸地域の激戦は今猶ほ続けられ敵米の誇る四艦隊を太平洋に迎へ撃つ吾が方の聯合艦隊及航空隊の将兵及び一昨年七月ガダルカナル敵上陸以来ソロモン、ツバル諸方面の防戦に死を賭して敢闘をした。陸戦の将兵には頭の下る思ひがし、早く吾も亦南の戦線に小国の爲に行かんと希望に燃ゆ。

欧州戦局も亦米英の第二戦線構築に対する独の反撃如何？と此の一カ年の動向が重大危機であることは否み得ない。

今晚も防空演習のある予定である。（望月記）

七月四日 火 晴【近頃、暮が盛】

毎日毎日晴天が續く。防空演習も昨夜で終り皆ホットする。近頃、暮が盛になって毎日夕食後パチパチやってゐる。

七月五日 水【征かん哉】

サイパンの戦闘益々苛烈を極む。サイパンにゐる同胞に遥かなる武運長久の祈りを捧ぐ。

現下の苛烈なる戦局を考へる時吾等理科方面學徒の征くべき日の遠からぬ事を思ふ。

何日、御召しにあづからうと喜んで出征する覺悟は持つてゐると思つてゐる。

闘はん哉 秋来る

征かん哉 秋来る

の感深し。

七月六日 木

益々サイパンでは苛烈さつのも、空襲必至だ。こんな時に吾々の考へるべきこと、成すべきことの（邊）に有るかを考へてみる。唯、皇軍の武運長久を祈るのみ。（北野）

七月七日 七夕といふところもかう苛烈に戦争が成つては仕方ない。今日も亦平凡に作業出勤、石田、平、戸倉帰る。

七月八日 大詔奉戴日 明日の日曜が楽しみ。今井帰る。

七月九日 楽しい日曜も何もせず、ねて、映畫みて、散歩して過した。北野

七月十日（月）【他人の苦勞を思ひやうて】

段々暑くなつて行く。実験や何やらで忙しくゆったりした気分を味ふ事は仲々難しい。

今度の小母さんの問題に就いては色々意見のある事と思はれるが、我々としてはこの問題に限らず他人の苦勞を思ひやうて、常に気を付けて余りに常識外れた事を仕出かさなない事が大切であると思ふ。

七月十一日（火）【ショーユ注ぎがない場合】

常識と云ふ概念に就いて自分もよくは分からぬのでこんな事を云ふのは甚だ相済まぬのであるが思ひついた事を少し書いて見る。

常識といふ觀念は現代の日本人の大多数は之を辯へては居る様であるが、實際に常識を生

かさうとしない常識外れた事をやる人が多い様に思はれる。幾ら難しい事を知ってゐたり、云ひふらす人でも常識と云ふ事に無頓着では、全然人間として成ってゐないと思ふ。一寸考へれば分る事もせずにして、ヘマをやる者が大分多い。例へば食卓の上にショーユの大ピンが置いてあって、ショーユ注ぎがない場合、イキナリ小脇にかゝへんばかりにして注がんとして、ドブドブ出して了ふ者がゐる。

質量が大になれば慣性の大きくなる位の経験 実は先づ、我々の中で知らぬものは居まい。今後、斯かるときは、何か別の茶ワンか何かに出して使用して下さい。ショーユ一滴たりとも我々舎生の手で運ばれたものだ。茲にも感謝の念あって然るべきと思ふ。

七月十二日（水）

此頃は大変暑い日が續く。今日も大変むし暑い。草地さんが徴兵検査の爲歸省せられた。夕食後、苺の御馳走がありおいしくいたゞいた。

七月十三日（木）【丹精のキャベツ】

サイパン愈々、玉砕か、最早、新聞には神兵といふ字も見えてゐたが。三年目の大いに消耗の御様子、お気毒です。でも体に気をつけられて大いに頑張ってください。

佐本さん丹精のキャベツが随分大きくなって来た。でもこの強い日光に照りつけられてしほれてゐる。枯れ まいかと心配してゐる。（石田）

七月十四日 金

毎日毎日よい天気の木影一つない飛行場で作業してゐるのはまるでフライパンで煎られるやうな暑さである。

七月十五日

久しぶりに雨が降り「北海道って全く雨の降らない所だなあ」と長嘆息してゐた飛行場の大工の顔も雨にぬれテカテカになり働いてゐる。

十六日

雨の日曜日 村上 平の両氏検査の為旭川へ 河瀬記

十七日【舎生大会】

今日は大変にむし暑い。温度の低い札幌では珍しい事だ。東京の暑さの様な感じがすると思つてゐたら、果せるかな午後から曇つて大夕立になった。然も降ったりやんだり。いやな天候の日だった。夜七時半より舎生大会、副舎長より、お婆さんの件に就いて御話しあり。その後舎の生活を有意義にせんが爲、短歌の会についての相談あり、八時過ぎ解散。外は相変わらずの雨。

七月十八日 火【全員戦死が報ぜられない】

作業に用ひる釘を持ち出す者があるとの件につき、隊長の訓話あり。午後の暑い一時を夢現に過す。二十日には慰勞会が行はれるとの故、夜望月さんに血液検査 きに安堵す。

ニュースにてサイパン島の全員戦死が報ぜられない悲憤肝に銘じ、必ずやこの復仇を成しとげんため我等は自己の與へられたる職務に邁進せんことを誓ふ。

七月十九日（水）曇後雨【母上の急死】

サイパン島の英霊に應へて作業に大馬力をかける。雨降らず、日照らず風そよぐ絶好の作業日和に恵まれて大いに能率が上がった。

小杉君、母上の急死に会い歸省される。（朝）

謹んで哀悼の意を表します。

二十日

決算す。一日食費五十銭、六十銭でもよいから、もっとうまいものを喰いたいものだ。寄宿舎の温かみは新しい小母さんが来たら湧くものと思つてゐる。（望月）

二十一日【東条内閣總辭職】

今日は朝から雨が降り三年目はアルバイトは中止で一日一杯英氣を養つて居られた事と思ひます。東条内閣總辭職、國事愈々多端を**知**つて我々学徒は何をなすべきであらうか。學問か、身体か僕には分らない。小母さん遂々、退舎さる。明日からは又自炊が始まるが舎生一同皆協同してやればやれない事はないと思ふ。

二十二日 土曜（晴）【雨 晴何かの因縁】

今日は昨日と打つて變つた快晴、風がそよそよと吹き実に快適な天氣であつた。朝から望月さんと田崎さんは飯炊きに大奮闘した甲斐があつて大層美味しかつたです。晩等もいつもよりエッセンが多い位で味は上々、小母さんがゐないと皆朗らである。雨 晴何かの因縁がありさうです。

二十三日 夜遅く村上、平両兄兵檢にての歸省から歸舎、両兄共に第一乙種合格の由。

二十四日 村上君の御馳走カレ、平君のコハメシ 朝の食事はにぎはう。此の日私と 事當番で朝食のメシは柔らか過ぎた。

二十五日 【月次會】

月次會。久方振りの月次會で有る。一年生にとっては初めてのそれで有る。宮部先生、亀井先生御出席。

河村君司會

開會の辭 河村 辯士は左の如し

感	石田君
川柳	今井君
予科三年をかへりみて	村上君
精神力	河瀬君
戦時下に於ける農業の重要性	佐本君
戦時下に於ける植物性ホルモンの重要性	本吉君

宮部先生から石澤さんの思ひ出の本を頂く。

かくして無事終了

二十六日 佐本君、本吉君アルバイトに出動。

舎も淋しく成りました。舎の炊事の小母さん来ず。どうしたことでせう。

二十七日 変わったことナシ。

二十八日 【約十九円の罰金】

望月様、洞爺湖へ旅行、帰りは へ沈 の由。土産のみ期待す。舎の小母さん、どうやら有ったらしい。此の日、電氣の球、違反にて約十九円の罰金、以後要心要人。

二十九日 集めました和歌の採点す。

三十日 今日は日曜なるもアルバイト出勤。

草地、北野、帯広アルバイトは舎の炊飯係として不参加の予定。猛雨正に篠つく如し。

今日歌會有る筈の所——時クラス會の爲三十一日の夜に延期す。 北野

七月三十一日 月 曇【近頃、舎生の親睦が】

七月も終りだと云ふのにさっぱり暑くない。夏なら夏らしくぢりぢりするやうな暑さになってもらひたいものだ。それでも、夜は寝苦しい。蚊が多いのには閉口である。

近頃、舎生の親睦があまりよく行はれてみないやうに感ぜられて残念である。互に分を守り互に和合に心掛けたいものと思ふ。

八月一日 火曜日【飛行場の作業が一段落】

飛行場の作業が一段落ついたとの由。三年生の皆様、長い間暑いところを御苦勞さま。今日一日を責任を果して愉快に休養された事と思ひます。昨日の事です、北野さんと草地さんの外交が見事に効を奏し、それが甘い煮マメとなり、早速、姿を(?)あらはしたのには感謝。 今井

八月二日 水曜日【和歌の会】

岩瀬君、飛行場の門衛に立ち、石田欠食。

予科一年生、十四時より二週間授業行はないとの事。

午後七時頃、警戒警報発令、爆弾が入っては困ると云ふので早速和歌の会に出る筈の汁粉を平げる。近来になく質、量共に素晴らしかった。どうも御苦勞様。

八時半頃から和歌の会をやる、仲々盛会にして入賞者左の如し。

一等賞 草地君 二等賞 石川君 三等賞 北野、石田両君 四等賞 河瀬君

終って後、性格判断(?)をやる。仲々傑作なのがあった。 田崎

八月三日 木曜日【アルバイトは又急に延びた】

今日で終了予定の予科三年諸君のアルバイトは又急に延びたとかだ。帰りの切符を買った人達は大分困ってゐる様である。

賄の小母さん、さっぱり音沙汰ない所、草地君の話によると、今日午前中札幌にゐる姉さんが部屋を掃除に見えた相である。

八月四日 金曜日

僕等は今度、部長の許可を得て、何処かの発電所見学を行ふ事になった。休がないので、せめてもと云ふので計画したのだが、午後四時頃になって教授の話によると、来週から二週間休みがあるらしいとの事なので、少しスツタ形である。 夕方村上君帰省。

八月五日 土曜日【秋を想はせる】

今日は馬鹿に涼しくて秋を想はせる。今年の天候は全国的に異変が多い様に見受けるので、農作物の方が心配になる。休暇、愈々本極り。小生近頃、神経衰弱なので帰省しても余り落着けぬので、友達と然別の方へワンダーフォーゲルを気取る事にした。夕方、河瀬君帰省。

八月六日 日曜日

朝、北野、河村君帰省。小生、今夜廿三時三十九分の列車で上川方面へ立つ事にした。

昼頃、望月さん帰舎。今夜は、警戒警報が解除になってからやっと好天気になったのであろうか、街の通りが割ににぎはしい。

八月七日(月)【ホームシック】

舎生も僅か八人、淋しい限りである。流石の小生もホームシックにかゝったらしい。十二日が待遠しい。一年生は試験にて猛勉。

八月八日(火)【午さがり】

大詔奉戴日。昨夜は七夕だった(?)らしく家々の軒下にはささやかながら短冊をつけた柳が見え「大東亜戦争必勝」などと書かれてあった。近所の子供が大勢集まり火をって遊んだ子供の時の七夕祭が大いに懐しい。一年目は試験、小生の如き化学で猛を取り、涼しく知らぬ顔をしてゐる。之ゝまゝよ、どうせ十二日ともなれば帰れるのだ。

夜小杉氏帰舎す

午さがり あつさひとしほ蝉の声

八月九日 平記【総員九名】

晴天ナレドモ気温左程高カラズ。最早北海道ノ秋近クニ迫レリト思ハル。木葉色付キタルモアリ。風デ大分落葉ス。

舎内無事平穩ナリ。総員九名、吾等一年目後三日デ休暇。明日ノ試験サヘ了セバ後八快適。十二日モスグダ。

扨、三年目ノ帯廣ノアルバイト十一日出発ト正式決定。今迄二ヶ月ニ余ル作業 - コレモ明日落成式ノ運ビトナッタ由デアルガ - ヨリ今又直チニ帯廣ヘ、全ク御苦勞様ナコトデス。併し益々健闘ガ期待出来ルデセウ。予科ノファイトヲ示シテ下サイ。夜村上帰舎ス。

八月十日 平記【ライスカレー】

昨夜ト同様ノ天候デアル。涼シ過ギル位デ、夜等大分寒イ。

本日、突然肉ノ配給アリ。草地サンノ料理ニヨリ初メテノ「ライスカレー」ヲテモ美味シク頂イタ。草地サンニハ毎日、毎日ノ炊事、全ク感謝ニタヘマセン。本當ニ有難ウ。

八月十一日

午前五時半発の帯広行きで岩瀬、石川両君出発。今井君七時半の急行で帰省、舎も段々さびしくなつてゆく。

草地君相変わらず我々の爲に種々心をくだいて炊事をして下さる。本当にありがたう。

小生も家事の都合で本日九時半の準急で帰省の予定。(小杉)

八月十八日【小母さん来る】

賄に深谷さんと言ふ小母さん来る。

田崎君と二人で感謝して迎へ。本当に吾々は新しい小母さんの見へたを喜ぶ。

八月廿八日【as soon as】

どん行のお蔭で混み合った狭い汽車の中に三日二晩、それも昔とは違って途中食ひ物は殆ど買ふことができず、腹ペコになって朝八時近く札幌に着いた。本ばかり入った重いトランクを持って寄宿舎に歸るや否や - 丁度英語の as soon as に相当するだらう - 直ちに登校、全く、目の廻る忙しさであった。夜は連日の睡眠不足が襲って来たがファイトを出して映画館に突入した。見たのは激流、昨夜は函館で セレベスを見たのに・・・

新しいおばさんが来てゐるので嬉しかった。

八月廿九日【腹の中で電気が発生】

帰札第二日目、學校は教練がないので午前中だけだった。門奈君が遊びに来て二人でまちに出張。喫茶店二ヶ所でソーダ水を飲み、狸小路のところまで来ると、思ひがけない戸倉君の英姿、電車通りに瞑想に耽って立ってゐるのを見つけた。それから三人で鳥久に入って焼肉を食ひ、出て荻野で牛乳を飲んだ。どうも腹の調子が妙だ。腹の中で電気が発生したのか遠雷のやうな音がする。

八月卅日【空陸立体戦】

昨日の暴飲が明らかに効果を奏し、急行列車だった。四月に渡道してはや半年、もう寂しくも懐しく、悲しくも美しい虫の音 - ぢゃあない声 - を聞くやうになった。戦争で萬事が逼迫してゐる故爲か年月の流れがとても慌しく感ぜられる。

扨、それはそれとして、なんと異常なる跳躍力をもった黒い小動物の活潑に攻撃してくるkとよ、この地上の豆タンク軍に呼應するに mosquito 精鋭軍、空陸立体戦に対して人間の神経の繊細なのを神に感謝すると同時に、恨めしく思ふものである。昨夜は三時近くまで眠られなかった。 今井記

八月卅一日(木)【今尚その勢滅せず】

此処にも蚤の襲撃あり、全く弱る、補足潰滅する事日に十数疋に垂んとして今尚その勢滅せずてな訳で体中にとだらけになり相である。

(以下太田氏担当)

九月一日(金)。トルコ遂に対独断交。米英軍パリに迫り、東部戦線ではワルソーを繞って一大攻防戦が展開されんとして、ヨーロッパの戦局は日増に重大化する。

九月二日(土)。連日、夜に入ると一雨あり、日中は矢張パツとしない天候である。二十日もどうやら免れ相であるがこの不順が少し気にかゝる。

九月三日(月)

今日も亦雨也。最近菜園荒し頻々として起る。果してそんなに見事に人が見て欲しくなる程なつてゐるものかと云う気が起り、夜、小雨が降り相な中を、某等四人は、大学構内へ見物に行った。とある所でよく観察すると成程大変によく実がいった南瓜がゴロゴロし

てある。矢張欲しくなって（筆耕者註 以下2ページ分、即ち九月三日後半から、同八日前半部までのデータなし。コピー漏れか？）

九月八日

（前半部欠落）なった。殊に一年目（俺だけかな）は早くねる事とし夜などまことに静かである。時々遠くに電車の軋る音が聞えるのみである。

暫らくつづいた雨も上り快晴となったがめっきり秋らしくなり、此の部屋から見えるエルクムやポプラの梢のさやめきもそれらしく感ぜられ、淋しさをそゝる。

星の美しい静かな宵である。（石田）

九月九日（薄別温泉旅行）古の重陽の何とか〔節句〕である。

本日舎では晝食もそこそこに、久し振りの快晴を利して、予定の薄別温泉へ一行六名勇んで出発した。途中電車の窓から林檎園の快適な様子にみとれ、定山溪から約一里余りの目的地に一同消耗の足を動かし乍ら到着したのは西日もくれかゝった五時近く。宿の様子が変わり、倶知安農業のアルバイトに来て泊ってみたのを、望月さん例の獰猛で泊めて貰う。

先ず実に卒倒するばかりの景勝に、午後の教練のさぼりを少しも意にすることなく温泉につき、食事に呼ばれる迄大いに寮歌で気焔を挙げ、小半刻の後快適なエッセンに恐縮しながら七時半卒に寝かされた。

後一時間雑談しきり、汽車の寝台車の如き室で二階、三階にねた。

「此の日、出発後に草地さん帰舎さる」

九月十日（薄別からの帰途買出しなど・・・）

七時前又々食事で起される。川の岸に下りて大いに浩然の気を養う。何処かの役所が温泉に約二十名程来て、エッセン作りをしてゐるのを一同大いにひがみ乍ら九時頃帰途につく。石切山で下車し川越を大井川式でやり晝食。

ついで路々獰猛に農家にさゝり、買出し部隊の本領を發揮す。その時の同類の多きこと、日曜のせい物凄く多く、一寸した田舎のお祭り程であった。人間生きんが為には如何なることも出来るものである。途中野菜賣の脚の早い小母さんを見付ける。舎に来て呉れる様に一同大いにねちゃつく。

四時帰舎。石切山からづーと歩き通しだったので一同猛烈消耗。砂糖の配給あり。Volum , Geschmack 何れも快適なお萩に舌づゝみを打つ。

九月十一日（月曜）晴。

今日は朝から快天気、久し振りに植物園へ行ってローンの上で寝て浩然の気を養う。舎生一同防空壕の覆い掛けの作業をしてゐるのにそれとも知らずぶらぶらして居た事を深く謝します。三年目帯廣より歸って来られる。皆元氣旺盛、意氣天を突くの概あり安心す。皆すぐ新角を被って歩く事でせう。

九月十二日 火曜日

まさかもう・・・と思つてみたのに又雨が降つてゐる。雨の滴の音に混つて虫の鳴声

聞える。ずっと吹く風もうすら寒い。愈々秋が近づいて来たという感が深い。

九月十三日（水）。朝、本吉君一ヶ月のアルバイトの後帰舎。元気な姿を見せる。髪ヒゲ
茫茫としてみて山から出て来た男の様であった。

九月十四日（木）（チフス流行）

チフスの予防注射をする。学内では大分流行して居る様で、冶金の主任教授達もかゝって
隔離されてゐるとか。とかく注意が肝要だ。

九月十五日（金）（宮部先生を訪問）

夕方、本吉君と宮部先生を御訪ねして快的なリンゴの御馳走になる。明日は送別会だが
特配の魚、野菜が当たればよいが。

九月十六日（土）（先生方を招く？）

パラオ諸島のペリリュイ・モロタイ島に敵上陸、フィリッピンをねらふ。

小母さんの御努力により、大変御馳走があり、我々は一全満腹したが御招きした先生方
は、時計が遅かったので皆家で御飯を済ませて来られたので一寸失敗した。

九月十七日（日）

終日雨なり。くさる。十河（ソゴ）君入舎。

九月十八日（月）（嵐、折れた木を拾う人）

朝迄はひどい嵐であった。昼迄にはすっかり収まる。到る処に木が折れ、それを拾いに
行く人が随分多くなった。雨合羽を着て風雨の中を拾ってゐるのだからたまらない。寄宿
舎の敷地も相当荒された。

九月十九日（火）（秋たけなわ）

昨日までの嵐がすっかり いて今日は文字通りの小春日和である。教室の窓越しにさす
日指しがぼかぼかと暖かく机の上を明るく照してゐた。時々吹く風が思ひの外ひやりとす
るのに秋のたけなはならんとするを知るやうだった。

豫科午後教授会ありてフライ〔frei = 自由〕となる。三年目の入舎数が学部 入出来ればよ
いが。午後八時 さんより大きな西瓜を御馳走になる。「石田」

九月二十日（予科三年成績発表）からりと晴れた日本晴、夏の如き熱さ。汗が流れた
程。而るに夕方雨がざーっと降る。実に女心と秋の空とはよく云ったもの。

本日予科三年目の成績発表さる。皆何れも優秀なる成績を獲保して居られる。全く自分
の態度を省みて恥かしく思った。

夜北野さん帰舎。相不変元気、新角で来られた。決算行はる。「平 記」

九月二十一日（卒業式）本日九時半より学部 科専門部の卒業式挙行さる。舎では佐
本君と小生の二人であった。愉快な二年半の生活終りめでたく卒業、感慨無量なものがあ
る。唯々舎生一同に感謝するのみである！！ 本日に、つまらぬ、いたらぬ自分を指導し
て下され、万の一の一にもこたへるべく最後の最後まで頑張り、一人でも多くたたききって
やるつもりである。御体を大切に。 二十一時に出発のため乱筆失禮（本吉）

九月二十二日

小春日和である。朝予科一年の石田、平君アルバイトに出発す。北野君も新角を輝かして転地保養のため層雲峡に向ふ。舎には四人残る。淋しいこと限なし。そろそろ新角が歸って来ることだらう。

戦局は緊迫し、今も札幌の空を双発の飛行機がその尖端に機銃らしき出して哨戒してゐて何かものものしい。

九月二十三日（買出し） 元吉君の帰省を始め、ぞくぞくと帰った小旅行、余と田崎兄の二人とは小配給品の少なさに琴似まで買出しに行きしが、見張り厳重にして、市内に入ることも出来ず、已むなし元の家に戻り預けて戻る。まったく悲しい。（望月記）

九月二十四日（日） 昨日も今日もよい天気であった。二人だけなので舎も何かひっそりとしてゐる。そろそろ新角が歸って来るだらう。

九月二十五日（月）

朝今井君帰舎。当てにしてゐた程でない由、がっかりしてゐた。此頃はよく野菜が配給になり、殊に南瓜が沢山ある。昨年問うに比べるとずっとよい。

九月二十六日（火）

山本、北野君帰舎。夜南瓜を煮る。実に美味い。

九月二十七日

夜ドロボー猫をつかまへ損ねる。ネコは頭が入れば出られると云ふ事を痛切（？）に感じた。

九月二十八日（木）

今日になって風が冷たくなって、そろそろ冬を思わせる様になった。楽しいような悲しいような。

九月二十九日（金）

望月さん土別へ出発。

九月三十日（金）（筆耕者註 土曜日の間違いだらう）

朝、石川、小杉、岩瀬の諸君帰舎。新角になったので元気ハツラツとしてゐる。どうか残された学生々活を心残りなくやって行って欲しい。夜は村上君帰舎。

十月一日（日）（玉碎の報）

愈々十月になった。冬ももう後一月でやって来る。テニヤン、大宮島の勇士並びに在留同胞の玉碎が報ぜられた。夜、河瀬君帰舎。

十月二日（月）（新角初登校。今の学校は・・・）

工学部の新角諸君は始めて登校。新入生入口等と書いてあるのを見て、我も二年生になったのかと思ふ。今の学校はまるで急行列車みたいなもので、止まらず無理やりに目的地迄ギューギューに詰められて連れて行かれて了ふ。途中で飛下り様と思へば大怪我をするし、三人掛けで便所へもよう行けぬ。夜、草地君帰舎。

十月三日（火）

医学部新角諸君登校。理農工は講義。講義もよいが講義だけではとても不十分である。そこに学部勉強の困難さがある。

十月四日 (水) (石炭5トン購入)

医学部新角休講。晴れゝば遊びに出ようと思つてゐたが曇つたのでやめた。時々雨が降る。石炭五トンくる。塊炭一・五トン、粉炭三・五トン。舎生總がかりで小屋に運ぶ。

十月五日 (木) 晴 (冬支度、室割)

医学部新角初講義。望月副舎長午後二時半頃帰舎。

米の配給日、小生運ぶも車より降すとき袋やぶれ少しスツたり。冬支度のため食糧、薪の確保のため委員を決めたり。室割決定。

十月六日 (金) (部屋の引越し)

午後の講義はねむくて大弱り。体が何故か疲れてゐて気が晴々としなない。新角諸君は勉強が皆腰を落着けてゐる。頼もしい。頼りないのは吾輩のみ。

夕方玄関前の薪を運ぶ。リンゴ配給あり。一人四ヶ半。

十月七日 (土)

新角は宣誓式。夕方倒木の整理。室の引越開始。十河、今井両君暁元氣に援農に出かける。

十月八日

大詔捧戴日。日中雨、夕方氣味悪い程暖い風が吹く。雨降りとて舎生殆ど舎に終日居た。室の引越もほゞ済んだらしい。

十月九日

医学部新角上級生との懇談あり。六時半頃帰舎。其他変りなし。

十月十日 火曜日

夕方岩瀬君退舎、及び石川君の友人も下宿が見付かり其處へ行かれた。其の他変りなし。秋冷身にしむ晩である。

十月十日 (筆耕者註 十月十日がダブっているのであるが・・・)

工学部新入生歓迎會。十日前の新角のきれいな着物をきた Virgin のやうなよろこびもどこへやら、毎日わけのわからぬ速記にノートを数頁黒くして製図に悩まされる今日此頃。

幻滅は人間の甘きを夢みる心、どこかにひそんでゐる借金取みたいなものだ。

十月十一日

寒い、寒い。眞白な着物をきた冬将軍が飛行場の一寸むかふまで来てゐるやうな気がする。夕食後ピンポン復活大分賑かである。

十月十二日 木曜日

寒くて憂鬱だ。朝奄美大島に四百機来襲と発表されてゐる。寄宿舍の生活は楽しくなつてきた。冬のスキーも待遠しい。

學部の勉強も一週間。幻滅の悲哀を味ひつつありか。一年目が独りもみず、何か目的物でも失つた様にさびしい。

某君から駄句と評されたもの一つ。

榆の根の落葉のうへにしにはてし蟬一つありさむき夕に

スタンドの燈に白茶の色冴えて踏切の鐘さむざむきこゆ 乞御冷笑。H・M 記

十月十三日 金曜日 (援農に行った今井君からの葉書)

今日は全學の体力章検定会です。新角がたくさん出て、張切ってやってみました。

今夕も又ピンポンに身を入れて。河村さん断然凄い。田崎さんの変なサーヴには参ってしまった。

小母さん具合悪く御飯は石川君が作られたさう。まぐろのさしみ。

台湾千百機を以て空襲せらる。戦局も愈最後の一線に来た。自分の生活を顧みて恥ぢる。

今井君から葉書が来た。「昨日寄宿舎で薪割ってみたのが、今日も山の中でそれも札幌から遠く離れて薪割してみますが昨日と今日との時間的連続が信じられぬ位夢のやうな気がします。」とは今井君らしい表現の様な気がする。石田と平は二十日頃、山本と今井は来月の十日頃帰られるさう。河瀬委員長、記念祭準備に急忙の様。

副舎長は、薪割と薯三俵の世話とを交換されたとか。御苦労様と思ひます。

〔筆耕者註：以後、十月十四日から、欠落ページを含め、二十六日までを、まとめて北野君が独りで記録したものと思われる。実際は負け戦であった「台湾沖決戦」を勝ち戦と信じ、折にふれ、このことを賞賛している。蛇足ながら、判読で非常に消耗！！〕

十月十四日

台湾沖の戦ひで気分良くす。大戦果！！ 海軍将兵の心や如何。唯々武運を祈るのみ。

十月十五日 (南瓜買出し)

かねてよりの目算であった南瓜買出し。三村、田崎さんを初め新角連中、大きなリュックにどっさり買ひ出し部隊。大學生の買ひ出し部隊姿、それは河村君のカメラにをさめられた筈。成果を待つ。三十貫の内五貫食ふ。快的！！

〔筆耕者註 ここでは十六日後半と思われる箇所に原稿が飛ぶ〕

いつ迄つゞくことやら、俄然楽しく成る。小生此の処実験で夜學校。変調な生活がつゞく。三村さん帰舎、久方振りで大変楽しそう。ピンポン、はしゃぐ。

十月十七日。今日も亦実験の為夜學校。午後ねないためまるで変な生活である。余り氣持良くない。

十八日。台湾沖の戦果に大いに勢づく。三村さん、診断書、脚氣とか、一ヶ月位舎に帰る由。

十九日。一旦 三村さん室蘭に出発。すぐ帰られるとのことである。

二十日。望月さん旭川に遊ぶ由。二十二日の休(臨時大祭)の有無大部舎の食量の種。

二十一日。石田が帰って来る。美味しい餅の御馳走に成る。平もおっつけ帰るだらう。

記念祭も近く成って来て活氣がつく。フィリッピン決戦の前の感あり。吾に幸あれと祈るのみ。

二十二日。三村さん、平、帰舎。三村さんも一ヶ月亦ともかくも一緒に生活出来る由、うれしい。大いに色々物を學びませう。

二十三日。望月さん帰舎。夜決算。をばさまに めて美味な食事 いたお世話を感謝する。

二十四日。フィリッピン沖の大戦果。吾が國は神國なりの念益々 きを覚ゆ。朝十河、急に予定が変更になったとか帰舎。記念祭の顔ぶれ大部揃ふ。夜長い間病気の為帰省中の戸倉君帰舎。早速ブーブーしい奴はたかってエッセンをせびる。小生もその内の一人。

二十五日。小生は実験をさぼってあるので此の処大変ひま。フィリッピン沖の大戦果に米英碎滅の信念益々 し。此の日珍しくも今井君帰舎。舎は意外の事に上を下へのもないがテンテコ。弟の急の病氣とか、少しやつれてゐる様な氣もする。

二十六日。引き続く大戦果、我海軍魂の尊くも亦高い精神に感謝し感激する。帝都を爆撃する。九州も亦空襲されるが上がる戦果の前に余り動揺せず。

敵は幾万ありとても……

以上机上にきいたまゝ書きだめました。御かんべんの程。 北野

二十七日 (筆耕者註：本文記載なし)

二十八日。琴似に行き記念祭用力ポチャを頼んでくる。

二十九日。朝少々雨、後に曇。二時頃琴似に行く。玉野さんで御馳走になる。

三十日。晴天。暖めで氣持よし。夜は台所でストーブを囲み駄弁る。

三十一日。十月も終る。近頃の學部の張切ものすごく予科生閑散の由。

十一月一日 十一月も初旬とはなりぬ。記念祭用の準備忙し。(筆耕者註：以下、2行、付箋により一部文字見えず。割愛す)

二日 記念祭の劇用意。各室が騒しい。(山本アルバイトより帰り直に帰省された)

(十一月三日 舎の記念祭、余興も楽しい。河瀬君の兄戦死)

三日、記念祭。お祝いの式よろこばしく行はる。菊の明治節と二重の喜。三時半より宮部先生はじめ九人のもう白髪先輩を交へて、會食。室は赤黄緑の「もーる」に飾られて美しさ、いはん方なし。植物園より借りたる菊及蘭は薫りを散ず。小母さん苦心の御馳走に舌つつみを打つ。散会后大乱闘の北野、河村両君のオペラより初る。夜十一時迄様々打興ず。

六時半の汽車で河瀬君、長兄の名譽の御戦死の葬儀の為帰省さる。

本日様々愉快なる事多かりき。

- ・ 逢坂牧師氏、會食中「今日の御馳走は量もあるし、おいしいですね。」といはれ、後々諸兄のユーモアをそそる。
- ・ 村上、戸倉、平、石田のツンツンぶし可成好評。

- ・ 望月、三村両氏のいと濃厚なる別れの曲の場面。三村さんの美しいメツチェン姿に大哄笑。
- ・ 望月、北野両氏の「寄宿舍時代」なる萬才は、他人を中傷する事甚しく、中傷されたる吾人は頗る怒り且喜ぶ。
- ・ 石川君、三村さんの手際よき手品。
- ・ その他諸兄の巧みなる、或は巧みならざる座興に夜のふくるを忘れ、明日よりの来るべき一年をたのしく過さん事を期す。

十一月四日。本日夜汁粉あり。ガンツファイト出る。副舎長はじめ「嘔きさうだ」とはたのしい悲鳴。謝悪筆、村上

十一月五日 (山に白いもの見ゆ)

灰色のどんよりした雲に覆はれ、しとしとと小雨のふる憂鬱な日曜日。予科生は學校へ。新角連中、台所のストーブのまはりで駄辯る。山に白いもの見ゆ。愈々冬である。

十一月六日

晩から朝にかけて少し雨が降った様であるが朝になると雨は止んでみた。

今朝山本さん帰舎さる。山本さんのおばあさん大分よくなったとのこと、嬉しい。

授業は四時頃終了した。日もだんだん短くなり、五時ともなれば眞暗である。六時近くから少し雨が降って来た。晚九時半頃の汽車で三村さん歸省されるとのこと。

十一月七日 (ストーブ許可) 霜降りて寒し。台所のストーブにあたる者多し。十日よりストーブ許可の掲示出る。

十一月八日。大詔奉戴日。電車の音に目を覚ますと遠くから君が代が聞え、実によい秋日和であった。ストーブを取つけた室多し。

十一月九日 雨

雨降り風さへ吹いて居る。河瀬、今井両君元氣よく今朝歸舎。医学部一年目軍事教習のため帰りが遅かった。夜は淋しく風の音聞ゆ。

十一月十日 晴後雪 (初雪、戰鬥教練、ストーブ許可)

十時頃よりちらちらと初雪があった。丁度教練、然かも戰鬥教練で雪降る中札幌飛行場迄走らされたのにはすっかり消耗した。今日よりストーブを燃やしてもよいとの許可、舎中燃えるの燃えないの大騒ぎだった。又永い間ごとと快い音をたて、燃えるストーブの傍で読書に更る事が出来ると思ふと実に快的なり。

十一月十一日(土)曇。(神風特別攻撃隊(特攻第一号)隊長 関行男大尉のニュース)

昨日の降雪にて秋より冬へ急特の感あり。午前測量実習風が強いので立ってみると仲々寒い。午後実験、木下助教授より演習林報告をいただいて少しだべる。それより映画“かくて神風はふく”を見る。仲々よくできてゐるが暴風の場面等はもう少し簡潔の方がよかった様な気がする。日本ニュース、淡々として死地におもむく攻撃隊関大尉以下の姿は思はず頭が下る。帰れば部屋のストーブ赤々と燃えている。(小杉)

(筆耕者註：関大尉ほか4名がフィリッピンから特攻出撃したのが十月二十五日。それが

ら半月で札幌にも映像が配信されていたことが分かる)

十一月十二日(日) 晴。午前中望月さんと台所を繕ふ。願はくば効果の絶大なるを。星の爺さん来る。リンゴ配給。(一人一箇) 桂林、柳州、終に陥落す。石川

十一月十三日 (嗚呼、特攻隊・・・しかし腹も減る)

桂林の戦果発表及レイテ島の敵輸送船団に対する神風特別攻撃隊の戦果発表あり。年に二千萬噸の船舶を建造すると剛語する敵に自らの身をかへりみず醜の御楯と出でたつ大和男子の意気が悲しめる。舎の南瓜さみしくなつて、朝の味噌汁に一つ二つ位しか掬へなくなった。南瓜飯も今は大豆飯となった。冬の夜長に腹は減るがどうすることもならず床に入る。

十一月十四日 (戦況についてあれやこれや思うのだが)

霜月モ早ヤ半。気温益々低ク夕方又々白イモノガ降ツタ。雪ガ降り出スト何時モ正月ガ思ヒ起サレル。今八迎ヘルノガ苦痛ニナツテ来タガ。

五時ノ報道デ神風特攻隊ニ呼応シ富嶽隊ノ壮烈無比ナ体当リガ知ラサレル。吾々ト同ジ位ノ年令デ盡忠ノ大義ニ敢然トシテ赴ク心境思ヘバ壮ナルモノヲ覚ユ。

人生二十五年ト自ヲ誇リ笑ツテ死ンデ行く心境全ク神々シク感ゼラレル。之ヲ思ヘバ心自ラ深イ落着ト云フヨリモ引キ入レルル様ナ感じ血液ガ下ツテ行く如キ思ヒ。

戦争モ全ク最高調ダ。敵米ルーズベルトノ四選デ漸々死戦ヲイドムトハ云フモノノ彼ノ物量実ニ恐ルベシ。西ノ方独逸ノ奮闘ノ状況ツマビラカデナイガ膠着状態ナノデアラウカ。

吾々学生生活ガ一体如何ニナツタナラ最モ之ニ即応シテ居ルノダラウ。アレヤコレヤト思ヒガメグラサレテ来ル。以上

十一月十五日 (往時の談笑が懐かしい)

舎のアルバイト、即ち煙筒掃除。配給物〇取に関する適当な人員の配当を望む。小母さんが人員の選択に苦辛してゐる事は一方我々其の方面の協力に缺くところがあるからと思ふ。

吸ひつけられた様に地面にへばりついた雪は、二寸もないくせに根雪になる相がある。寒い風がもう北海道の冬の味を人にしみじみ感じさせる。〇燃やすストーブのあのあたゝかい感触を思い出すと無性に化学実験なんか放つとばして帰りたくなる。學部の人が多勢を占める今日どうもタナボコ(一名カマボコ)が多くて夜の部と雖も往時の談笑はなく一寸淋しい。戦時下でこれが普通かもしれんが〇〇の二年位前の學部の人達の持った重厚な余猶ある(といふのは駄舌ることを云ふのでないが)勉強ぶりが段々影をうすめてゆく様な気がする。でも學部の人達は〇当にいそいそと勉強志てゐる様子が見えて夜の食事は時とすると四、五井飯が電燈の下に残ってゐるのを見るとその多忙さがわかり、予科健児たるもの甚だ現在の生活を如何に無統制に送つてゐるかに気づいて申訳ないものがある。

十一月十六日(木)。一年生諸氏フクチャンに。笑へないマンガだったとか。

一日中ぼそぼそ白いものが降つてゐた。佐本氏援農より帰舎、御苦労さま。

十一月十七日 金 (宮部先生宅のじっちゃん?)

宮部先生宅のぢっちゃん消耗して〇〇 も不可能とのこと。平、戸倉、田崎の諸氏寒風について猛然挺身、先生のご心配を解消してあげた。

十一月十八日 土

曇りがちな日だった。眞夜中に屋根を打つ雨の音すら聞え、〇〇るもたいした寒さを感じられなかった。こんな調子がつゞけば北海道の冬も案外過しよいのだが、でも冬の味は本当に出ない。〇中會だとかで村上、草地、両新角氏はグランドホテルの三階で學部の顔合せがあったのに臨まれた。

十一月十九日 日 (玄關の修繕、エッセンが美味しい)

伝統をほこる青年寄宿舍の玄關はよる年波に相当壁が落ちて消耗して来たのでベニヤで修繕した。星のぢっちゃんが大童だった。多年の懸案が一撃に解消した様な気がする。

夜のエッセンは随分と美味しく、いも飯は腹にこたへた。なかなか腹もちがよい。戸倉君は親類へ。旧舎生、野尻氏夜分遊びに来る。學部の方々猛然勉強、かかる學徒は美しくも尊きかな。箱一杯の石炭は粉炭の多いときであると余分になる位である。お陰であたたかく北海道の冬をすごせる。

十一月二十日 (風邪、授業)

小生一昨日より今日にかけて風邪を引き熱が出て大いに消耗する。昨夜は早く床に就いたが水枕の口が不完全だった為夜中肩冷たきを覚えて手探りをするとフトンの中は水びたし。敷布はフトンの模様が染み出して我ながら大いに苦笑する。河瀬室長には大いにお世話になりました。

午後の物理は熊襲の如き小林教授。始め板戸をしめて眞暗にする。皆快哉を叫ぶ。授業開始後皆本を閉じ筆入をしまふといふさわぎで、彼のまだ「三十分ある」といふ静止の声も聞かばこそ獯猛に授業を止め(?)させる。石田

十一月二十一日(火)雨。暖い。午後雪が降るかなと思って居たら雨だった。舎内は無事。

十一月二十二日。石田君午頃ノ汽車デ帰省。村上君夕チ帰省。

十一月二十三日。新嘗祭にて學校は休み。村上君帰舎。(河瀬記)

十一月廿四日 (金) (東京空襲。学生のありようは?)

東京に遂に B29 七十機程来襲。例に依り新聞ラジオの報導のみでは判然とは分り兼ねる様な事であらうが、兎に角多数機で来襲が出来る様になったのであるから一般の公衆に対しては兎も角として我々にはもっとこの戦の様相をしっかりと見なければならぬと思ふ。

夜友人の処へ遊びに行き大分駄べる。「一功成って万骨枯る」この様な事が如何に多き事か。大学の制度にしたって、今の儘では大部分教授によって学生が商品扱ひをされ、その儘学生の抱いてゐる witz が浮かばずに殺されて行くと、一面から見ればこれは確かにた様である。併しながら本当に學問を愛し、教室を愛し、北大を強くさせんとする者はこの境遇に打沈まず、飽く迄自分の方向を定めて、それを仕遂ぐるべきである。其処に又教育者としての Liberality が求められねばならぬのであらう。

十一月二十五日 (土) (病床であれやこれや思う)

今朝二時頃から急性腸胃カタルと覚しき病にとりつかれ相当苦しみぬいた。苦しさがやうやうなくなってきた時はもう朝七時頃、暫くの間胃が痛んで鬱々として寝てみたがその内痛みも去ったが起きるファイトがない。終日ねてみると身体のおそここゝと痛んでくる。みんな学校に行こうとして一人で舎に寝てみると変に色々な事が思ひ出される。学校の事、學問と時局の事等・・・

大學教授の無責任な事等。何だか一人でオッポリ出された様な氣持で有る。幾多の先輩から“大學は自分で勉強する処だ”と聞かされたがそんな事はいゝ加減に聞き逃して来たのだが、今と成れば沁々思ひ当り自分で勉強することの難しさを感じず。四六時中休學休學と追ひ廻されてみて、それで一ヶ月を振り返って如何にとりとめなかったことか！！世の中の一寸の波の前にも吾々個人の力のはかなさ・・・ 余程しっかりせにやならんと沁々と考へる。身体の調子が直ったら改めて張切って又進む心算で有る。北野

十一月二十六日 日曜日 ([Co] 事件とは?)

東京偵察に B29 が又一機来る。実に小しゃくにさはるが。

昨夜来 [Co] 事件なるものあり。うら若き某君、某君、某君が夜を徹して熱中せりとの事。古強者は大抵讀了との事。この寄宿舍中がかぐはしき話をにやにやとやった日にはとても情けない事ではある。〇〇なる舎風の為に焼却を提言せんと欲する。

近頃下痢患続出。北野君その為や大學教授攻撃を掲ぐ。望月副舎長同伴の御方と共に帰舎せらる。河瀬君、定山溪へゆかれ(昨夜)今日は未だ帰られず。(村上記)

十一月廿七日 月曜日

援農に出たり帰省したりで久しぶりに筆をとる。といっても何も書く事がない。雪が珍しい小生はもっと大雪が・・・それも夜の中に・・・降ってくれる事を祈ってゐる。

十一月二十八日 火曜日

午後三時頃帰る。今井さんと二人で味噌、醤油を取りにいく。帰ったのは五時半、腹が減った。今日より一月ばかり望月さんアルバイトで夕張炭鉱病院にいく。

十一月二十九日

雪つもる。二日前までは一つもなかった雪がまるで勤勉なものが借金を急いでかへしたやうに今日ではもう眞白である。今年は年内に雪がつもんなければよいがなあ・・・などと・・・絶対に実現しさうもないことを友人と話し合つたのであるが考へてみれば不思議なものである。自然の摂理といふか 毎年今頃にもなれば必ず降り積る眞白な結晶・・・一年ぐらゐ忘れてもよささうなものを。全く不思議なものである。北野

十一月三十日 木曜日 (石炭不足。二室合同となつたのはこの時からか?)

副舎長代理、田崎兄を中心に石炭不足対策をねる。結局二室の者が一室に集まることに決定す。

十二月一日 金 (二室合同実施)

月は明けて師走である。十一月はまたたくまに過ぎ去った。あまりにも早く月日が経過する。今日より一室に集まることを実施す。

十二月二日 (石田)

昨夜は雨が降り 道路はすっかり凍りついてみた。此の中を新角の面々 の間にて朝早くから つて れたが帰舎してみると皆消耗の御様子。各部屋も大体四人づつが落ち着いて も仲々賑やかである。

十二月三日 (日) 晴

日曜であるが予科生諸君はお気の毒にも授業があり登校。朝、村上、山本、平の諸君剣道をなす。自分も仲間に入りたいがどうも朝起きるのが億劫なのでこまる。(河瀬記)

十二月四日 (月) 雪 (二室合同 二日目)

今日も雪が降る。此頃は毎日降ってゐる。よくもまあ水蒸気があるものだ。札幌の冬は毎日降る雪も見物である。あのしんしんと夜の静けさを破らず絶えず降ってゐるのは、何か天から宝でも降ってくるやうに、沢山拾ひ集めて見たい様な氣も起る。四人一組となつて二日目、机の配置も上手くゆき中々調子のよいものだ。我々の部屋は医科系統ばかりで話も医学的の事許りで興味をそゝる話も大分ある。四人一組となるとどうも他の部屋へ行きづらくなるものだが、そんなものには超越して、どんどんと他の部屋へゆきゝしてだべりたいものである。

十二月五日 平記

段々と気温が降り、毎日忘れもせず雪の奴が降りて来る。お蔭で朝起きるのが億劫でたまらない。帰ってみると援農先から便りがあった。そのたどたどしい筆のあとを見、全く感無量。今井君此の所スキーの練習に大童、大分上達の様子。予科の試験もぼつぼつ始められる。後少しで休暇になるのだが矢張り苦が樂の先に来るのが定りの様だ。

十二月六日 (十二月八日を前に)

昨年の中頃もさうだったが、八日といふ日に対する漠然とした胸の底から湧く國民的感情をぞっと考へてみる今日この頃である。神の存在を非定した米英によって彼等にとって藪蛇的に起つた大東亜戦争が眞の神、即ち天皇皇室の存在を知らしめるものであることを思ふとき、我々の國民的自覚は國體の本義にまでさかのぼつたものとならねばならぬ。日本臣民として大東亜指導者としての自己の立場を深省せしめらるゝのだ。云はなくつても解つてゐる筈のこの点が案外浅いものであることに氣づく。

夕食前大部の舎生入浴。今日ジャンケンですると破産するかもしれぬ。どうも近頃悪い傾向を生じたものだ。尤も俺は余りすらんけど。四人一室制も別段室として不便がない。たゞ〇時都市國家の相あるを如何せん。望月副舎長の動静がわからないがどうしてゐられることか。

十二月七日 木曜日 吹雪 (レイテ島の戦況)

昨夜又一しきり雪が降つた様である。十時頃より猛吹雪となる。夜に入って風も収まる。

舎内至極平穩なり。リンゴ配給あり。

レイテ島決戦愈々熾烈を極む。三時の報道では又も落下傘及び強行着陸により敵飛行場を襲ひたる由、眞に悲愴にして血湧き肉踊る。 石川

十二月八日 (金) (大東亜戦争開始三周年)

今日は大東亜戦争開始〇三周年の日。午前七時半農學部新館前に集合、勅語奉読式の後在郷軍人北海道帝大分会並防衛隊の結成式挙行。師團長閣下の臨席あり。引続き全員中島公園護国神社に向ひて行進。社頭にぬかずきて大東亜戦完勝をちかふ。更一同東宝〇於て講演と映画の会に行く。海軍人事部長角田大佐の講演と“雷撃隊出動”あり。三時頃開散す。有意義の一日で在った。

十二月九日 (土) (ヒダカ草 学名に宮部先生の名が・・・)

久しぶりに筆をもつ。何を書いてよいか見当がつかない。

学部に入る早々アルバイトに出たり、教授の出張などで講義はそんな進まぬから勢参考書熱が旺んで暇さへあれば本屋漁りをして手当り次第と云ふ輩が多くなった。学部は勉強する所であると部長は入学式の冒頭に云はれた言葉がこれからの吾々の金科玉条であらねば大変なことになる。吾が宮部先生は偉大なる植物学者であることは吾々の周知のことであるが、今日は植物分類学で学名は、その発見者の名誉を表はすために、その人の名前をラテン語化して之につける。その代表として Callianthemum Miyabeanum ヒダカ草が出て、何か貴いやうな、自分のことのやうに、うれしさと誇らしさを感じた次第である。先生のご健斗をお祈りする次第である。 佐本記

十二月十日 日曜日 (床のなかの妄想)

快晴の日曜日、子供たちが青年スロープで下る聲がさしがしい。故に小生も平とそりを持ち出して共に下った。予科生諸君、明日より帰省迄試験で責められるとか、お氣の毒な次第。

ルンペンがもえないで、室中ごみをとばす。いゝ工夫はないものであらうか。

小生近頃札パリファイトなく(原文のまま)今朝も八時過カチカチの鳴る迄床の中に潜没してみたのであるが。その時にこんな事を考へた。「吾人はインテリである。神経細胞は人体中のインテリである。故に吾人は神経細胞の如くあるべしと思はれる。(神経細胞の略画を描いて挿入してある)即ち短い二三の突起と一本の長い突起を備へたものである。長い突起は自己天分の職業、短い突起は自己の趣味」・・・など書いたら諸君の嘲笑を買ふ。日記の枚数も残り少いさうであるから。実はもう少し妄想を逞くしたのだけれども、夢のさめきらぬねごととしてやめにします。村上記

十二月十一日 月曜日 (ストーブが燃えない)

四人一部屋もやっと落ついた頃、吾々の部屋はストーブが燃えないでこまる。予科の人達は試験がぼつぼつ初まった様子。大いに張切って下さい。此の冬の休みには帰省出来るかしらん。そのみ氣にかゝる。 北野

十二月十二日 火曜日 (円山でスキー)

朝から雪が勢よく降って呉れたので快調とばかり早速午後の授業を代返にまかせて圓山へ！ 寄宿舎裏スロープの猛練が効果をあげ、直滑降も見事なもの。轉んだ回数はそれでも十回位はあった。大いに消耗して舎に帰る。夜の眠いことゝ言ったらまるで夢心地。そろそろ試験が始まった。平常の徹底した怠慢が“てきめん”に影響して一夜漬けではちと間に合はぬ。それではノータッチ・・・ノータッチのスリルを味はふのも面白いもの。早く一週間よ去れ。冬休みよ早く来い。 今井

十二月十三日 (火) (デレキの語源を教えてください)

久しぶりで一時間目から登校したら、朝の冷い事。耳が千切れ相だった。吾部屋のストーブは昨日迄実に快的にもえて諸兄センボーの的だったが、北野一派が部屋を変へて隣りに移った今日は如何なるものか余り調子は宜しくなく少々ヒガミますナ。向ひの部屋でストーブの口を開いてデレキ(この語源は不明です。誰かお分りの方は御教示の程を願ひ上げます)。で突付くとゴーツと音がするのを聞くと吾部屋の“あの時、あの威厳”を思ひ出してウタタセキ寂たるものあり。この字はストーブの傍にかざりつきながら書いたのでこんな金釘文になって了った。悪しからず。御賢察を乞ふ。

十二月十四日 (便所裏のスロープ)

赤穂義士吉良邸討入の日だ相だが札幌にもし四十七士が居たらこんな寒い日には多分討入をしないだらう。

便所のスロープは相変わらず賑かである。子供達のファインプレーを用を足しながら眺めてみると口さがなきこましゃくれた女の子「あの人小便しながら見てるんだよ」・・・皆が見るので小生いさゝか恥かしくなり早々退散。しかしどうしても見えるのだから仕方がない。〔筆耕者註：十二月十日、同十二日に記載ある「スロープ」もこれを指すのだから。舎生、近所の子供たちともスキーの練習、遊びに使っていたらしい〕

十二月十五日 (煙突掃除、蜜柑配給)

今朝起きたのが何と八時半あわてゝ用意をし、学校に行く。午後休講。試験の発表あり来週より毎日あると思へばいやになる。午後帰てから裏の煙突掃除をす。炊事のストーブもついでにした。晩はよくもえて快適であった。今日蜜柑配給になる。

十二月十六日 (試験、寝坊)

外は吹雪が吹き荒れてゐる。内はストーブが燃えさかってゐる。吹雪よあれよ、ストーブようんと燃えよ。そして俺の試験の憂鬱をさっと吹き飛ばして呉れ。今日も試験明日も試験、毎日寒々とした教室で答案に向って投げ首をしてゐる俺。監督の先生が目を光らして見てゐる。

近頃猛烈に起きるのが遅い人がある。今朝も某部屋の二人八時半近く起きて大あわて、その一人の如き飯盒に飯をつめ、それに汁をかけて出ようとしたまではよかったが、昨夜帽子を食堂に置いた事を失念して周章狼狽、進退窮まって学部某氏の古色蒼然たるを借りて学校に来れば途端に数学試験は始まってあり、胸の動悸は収まらずコンデとったとか？ 以って瞑すべきなり。

十二月十七日 (コンディ)

此頃はコンディの滅茶続きだ。今日もコンディ明日もコンディ此の身は終にはどうなることやら、明日は有機物理の試験、物理は全くのノータッチ苦しい時の神頼みあるのみ。普段怠けぐせのついてゐる者は手がつけられないものだ。

十二月十八日 月

今日も雪、寒さも愈々本格的になって来た。予科生諸君試験も後わずか、みんな最終のがんばりをみせてゐる。もう冬休みも一週間足らず。全く待遠しい。 河瀬記

十二月十九日

豫科生諸君帰省不能で大いにかっかり、試験の連続で消もうして居られる。奮闘を祈る。

十二月二十日 (一日の食費参拾参銭)

河村、北野両君委託生試験。夜、決算。一日の食費参拾参銭也。いよいよ正月も近づきました。皆さん目出度いお年をとられることでせう。休みが近づき一番楽しい時である。豫科生諸君吾々にひがむことなく奮闘せられんことを。

十二月二十一日 (スタ魂祭?)

早朝七時にて小杉氏帰省さる。予科生の招魂祭も無事修了、続いて夜、「伊呂波」にてスタ魂祭舉行、兼ねて小生の壮行会とは感激の至りです。學部の方、あるひは旭川の方、帰省〇が起って、帰省不能者の心中おだやかならぬものあらんとす。〇〇彼氏等はオッパイの余りでよいから残り四組にも悪を垂れ給はらんことを。予科生、製図に大童、余り美的ななのは居ない、とは工學部某氏の暴言。でも近頃たんとお〇〇〇〇ございますこと。

十二月二十二日 金 晴

起床前の時間の早くたつこと。工学部の冷蔵庫の様な講堂でこんなに早くたてば……。全くまゝならぬことではある。村上、平君あわただしく帰省さる。我室はこれで二人となる。定員になったにすぎないが一寸淋しく感ずる。何処かの部室でトランプの賑やかな声がする。自分は明日迄の宿題で青息をつきつつ。今井、新得へ。

十二月二十三日 (帰省前の足止め 憤慨)

事実上の予科の授業は終了で本来なら今日は予科生が飛ぶ様にして汽車に乗っかる筈だった。あゝそれなのにそれなのに學生主事が少し氣を利かしていゝ加減帰省してから訓令でも何でも出せばまさか如何に文部次官だって呼び戻す權威もあるまい。學部なんか実にその点科学的にやってみるのに。

中央講堂で九時から予科長訓示、曰ク“ 帰省禁止件 ”“ アルバイトの件 ”……。退屈にして眠らんにも寒氣、さうはさせず、つらいこと。十時半より大塚工學部教授の“ 液体燃料対策 ”非常に有益で必勝一筋道を認める心地。

帰省、石田、佐本。河瀬氏はニセコへ 小母さん、角田さんへ

十二月二十四日 (少数舎生 エッセンで沈没)

今日から愈々少数舎生制。エッセンの割のよいこと。いゝねー、お正月もずっと居残らうかしらなんど野心も起きようもの。六人だ。“ 鬼の居ない内に ”といふところ。ごそごそ

エッセン探し。御飯もむれ加減がわからないので性急な某理學部生は三十秒おきにお釜のふたを明けるのでさっぱりむれない。矢張こうゆう仕事は女の人に限る。御飯を焚きすぎで二人前喰ったら皆沈没してしまった。バターでとろーり、とろーりと。いや後で読む奴がむくれるからな。小母さん八帰らない。

十二月二十五日、クリスマス

米国では快適なおクリスマスで餅ぢゃない、ベーコンと、ジャムとホットケーキと、ドンドンやきと、なべやきと・・・？ 畜生め！ くそ俺達だって勝ったら砂糖漬けの餅と100%〇酒で意気を揚げてやるぞ。お米配給で餅米がたんまり入った。二十八日に五人位で喰ふ積りだ。快適！。配給所のおやぢ快適な人だ。十六人分くれたぞ。星のぢっちゃん靴のまゝストーブでまたあぶりしてゐる。うすの相談だ。夕方小母さん帰省。豆を砂糖で食べようと思ってゐたのに。スツると思ったが小母さん寛大になく作ってくれた。するめのお土産にかぶりつゝ、お留守居活だ。思ったより〇〇さないでスツちゃった。今井帰舎。

(筆耕者註 スツる、スツちゃった、というのは当時の隠語か?)

十二月二十六日

予科生は冬季鍛錬で御出発。大抵一時〇で終る様だ。特に雪降りはずらいらしい。重勞並の辨当を食るともうやる元気がなくなる相だ。草地さん、石川さん、北野さん帰省。石田、〇帰舎。

十二月二十七日 (餅つき)

今日は餅搗き。三斗余りを残留組大童で搗きあげた。工學部某氏は杵と取組んで死物狂いであった。十河寄舎、今夜立帰るとか。河瀬氏は月寒へ。望月氏のお帰りのおそいこと。土別へ真直ではあるまい。

十二月二十八日 (配給券)

朝山本切符を買ひに行きしも駄目との事でがっかりして帰る。昼過ぎに市役所へ行って障子紙(コンナのはどうでもよいが)肉(コレコレ)晒あん、味噌の配給券を受け取り、例の味噌・正油を取る家へ行ったが沢山の人に来てゐて随分待たされ、やっと買って帰れば早夕飯時。時に佐本氏帰舎。アチラの話にツカれる。同道された某工学博士の卵は別にノスタルヂアにもかゝらず、元気に滑ってゐる否転がってゐる由。

夜「宮本武蔵」総見に出掛ける。全くの期待外れにガッカリ。

十二月廿九日

朝山本氏一番で帰省。斯くも沢山に作り置きしアンコ餅無くなる。全くオドロキマシタ。

夜、望月氏帰舎。尚平井、午帰省。

十二月三十日

今井氏朝からスキー行。道に迷ひ、夕飯時分に辿り着く。

十二月三十一日 (昭和十九年 逝く)

將に逝かんとするか多難なりし昭和十九年。考へてみれば大晦日などといふものは人為的に借金取あたりがつくったもので、次元的にみて空間的時間的に絶対的な“境界”を示

すものではないと思ふのであるが、永遠に去り行く昭和十九年に対し、決して徒ではないある一種の厳かな感傷を感じないわけにはいかぬ。

おごそかに静かに逝けよ昭和十九年。将に來たらんとするか昭和二十年。美しき年であれ、幸なる年であれ、豊かな年であれ、そして我々の為にも有為なる年であれ。

石田君帰省す、残留は僅か四人静かなる寄宿舍で各々年を越すわけである。

T氏とともに我科学技術の貧困を嘆じ馱法螺を吹きつゝ。 K